

## VII 4区の調査

### 1. 概要

2区の西側、1区の北側に位置する。本文 I (2) 調査の経過で記したとおり、本来、本遺跡の調査区には入れていなかったが、側道部のパイプ埋設工事により遺構を確認し調査区を拡張し4区とした。従って東西区画は-1～-4になった。調査区内に東西、南北方向にU字溝が埋設されていたため、その部分のみ残して調査した。

4区の中で調査区北方に掘立柱建物3棟が位置するが、その周辺は砂丘微高地になっており、西方に位置する2区との間および4区の南方は極めて緩やかに低くなる。図9に調査区全体の空中写真を掲載する。写真の黄色～黄褐色の部分が砂丘微高地になり、黒褐色部分が低地部分になる。掘立柱建物が立地する周辺のみが島状に微高地になる。従って4区の建物群と2区・3区の建物群は立地が異なる。

また、4区の建物群の特徴として、他地区に比べて柱穴や床面積が広いことや、主軸を揃え整然と配置されることである。これらの建物群の時期は奈良～平安時代前期でSK401などから、他の区画の建物群より新時期に位置付けられる。SK406、SK412は古墳時代中期後半であろう。

### 2. 遺構と遺物

#### (1) 掘立柱建物跡

##### SB402

調査区の北方に位置する。建物の北側は調査区外にのび、東側はSD411に切られる。南方約7mにSB404が東方約11mにSB405がある。桁行2間以上、梁間1間以上の掘立柱建物である。長軸方位はN3°Eで桁行の柱間はP1-P2が2.5m、P2-P3が2.4m、梁行の柱間はP3-P4が2.1mである。柱穴は径約60cmの平面円形で、P4は上部を削平され遺存状態が悪い。埋土は黒褐色土である。

P2から土師器の胴部片が、P3から8C代の須恵器杯底部片が出土している。

##### SB404

調査区の北側よりに位置する。建物の東側はSD411や調査区・試掘坑によって切られる。北方約7mにSB402が、北東方約13mにSB405がある。桁行不明、梁間2間の掘立柱建物である。長軸方位はN90°Eで梁間の柱間は芯々で2.1mである。柱穴は長径1～1.2mと規模が大きい平面円形、不整円形である。柱穴は削平され、P1は深さ約10cmほどの遺存である。P2、P3では柱根が腐食し木質部細片が残り、柱痕跡が確認できた。P1から土師器高台付き杯底部片、土師器細片数点、須恵器片が出土している。

##### SB405

調査区の北方に位置し、建物の北半部は調査区外にのびる。西方約11mにSB402が南西約13mにSB404がある。桁行4間以上、梁間2間以上の掘立柱建物である。長軸方位はN89°Eである。桁行の柱間はP1-P2、P2-P3が1.7m、P3-P4が1.9m、P4-P5が2.2mである。梁間はP5-P6が2.1m、P6-P7が2.2mである。柱穴は平面円形や楕円形、不整形で長径は0.65m～1.15mと平面形態、大きさとも規格性はさほどみられない。P5で柱痕跡がみられたが他は見られず、柱を抜いた後の堆積埋土であろうか。P2から土師器蓋口縁部片、P3から土師器細片数点、P5から須恵器、土師器細片、P6から須恵器壺胴部片、P7から須恵器、土師器細片、7世紀代の須恵器杯口縁部片が出土している。

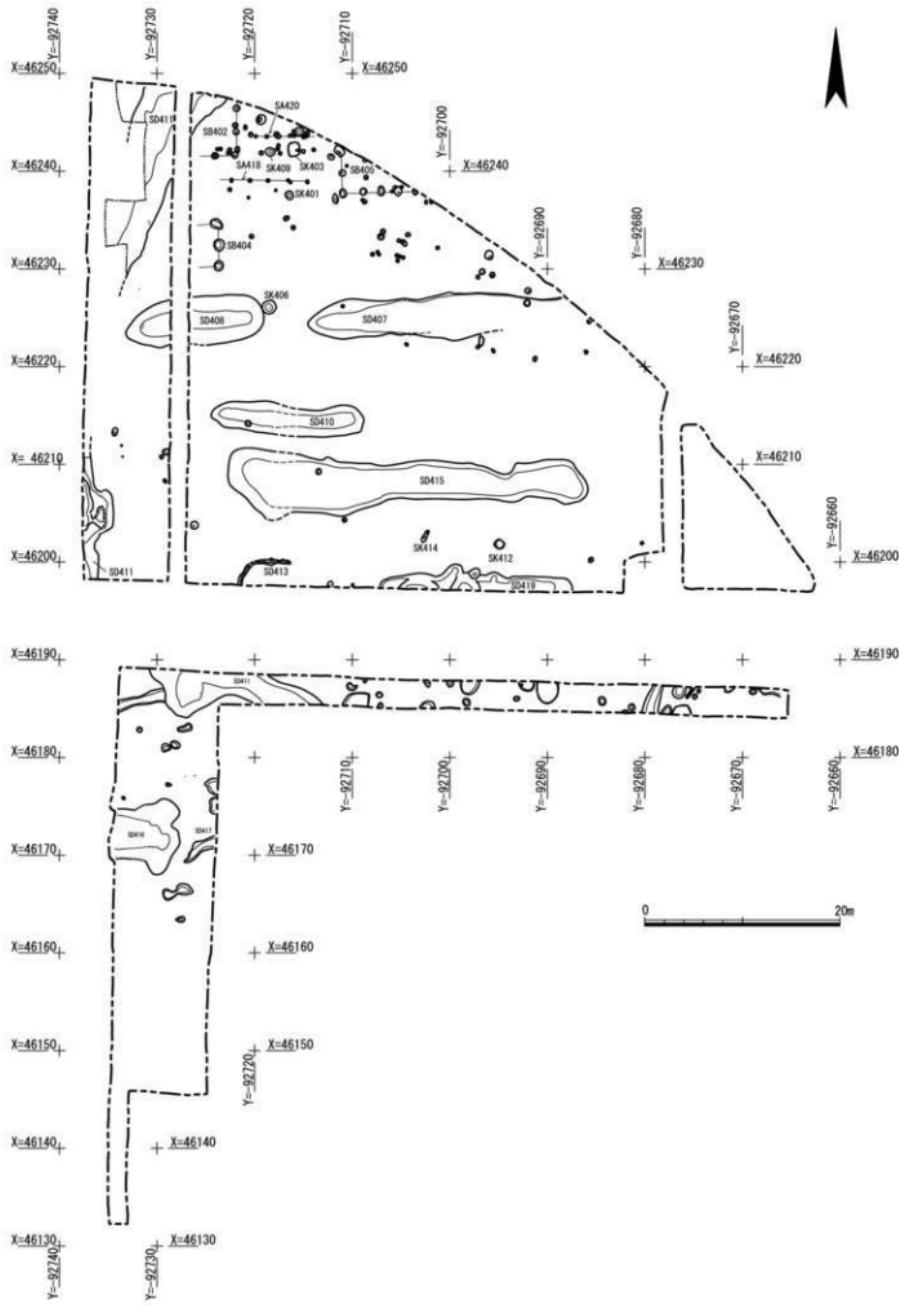


図92 4区構造配置図 (1/500)

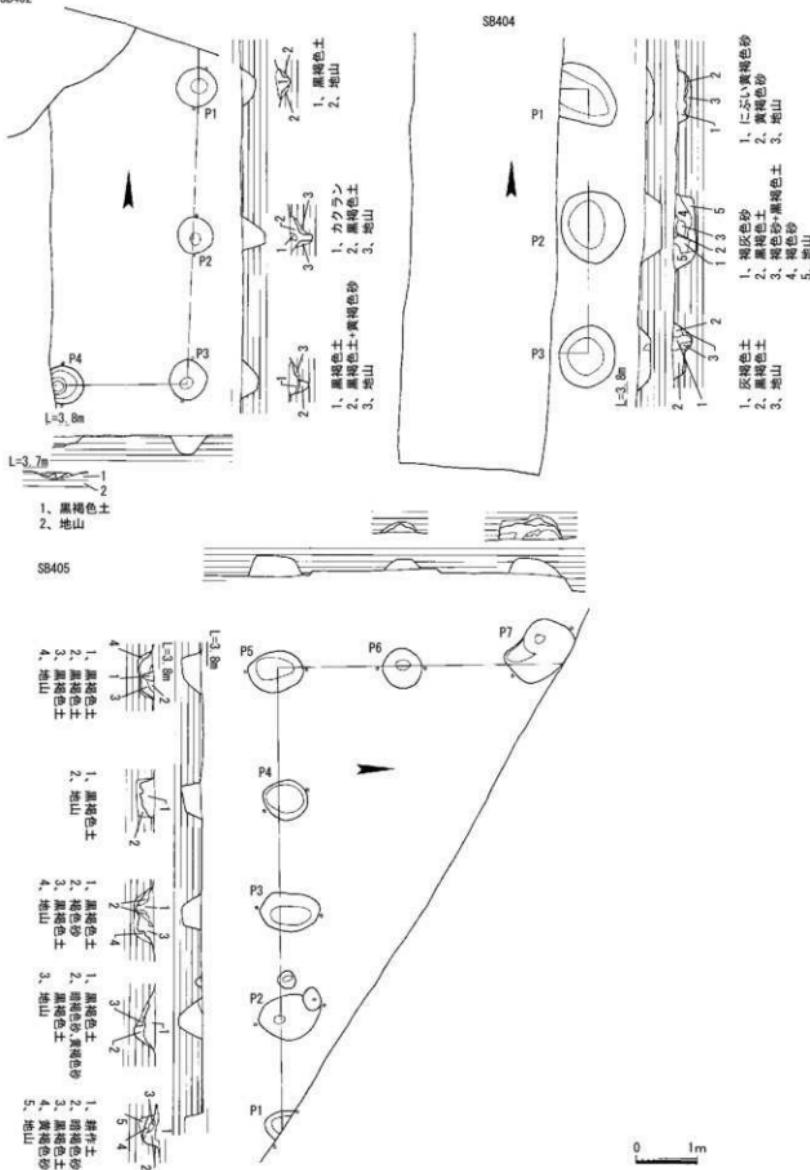


図93 SB402・404・405掘立柱建物跡 (1/80)

## (2) 構列

### SA418

調査区の北側に位置する。北方4.5mには平行してSA420がある。SB402とSB405の間の空間にSA418とSA420が平行して並ぶ。

長さ8.1mの構列でP1～P6の小穴が一直線に並ぶ。P4とP5は近接しており、どちらが構列に伴うものかは不明である。小穴は径30cm～40cmの平面円形～不整円形であり、上部が削平され遺存高は約10cm内外である。小穴間は芯々でP1～P2は1.85m、P2～P3は1.88m、P3～P4は2.1m、P4～P6は1.98mと比較的のそろっている。柱根は検出できなかった。出土遺物なし。

### SA420

調査区の北側に位置する。南方4.5mには平行してSA418がある。長さ5.5mの構列でP1～P7の小穴が一直線に並ぶ。P4とP5、P6とP7は近接しており、P5とP7は他の小穴に比べ小さいことから構列に伴うものかは疑問である。小穴は径28cm～50cmの平面円形～不整円形であり、遺存高は10cm～30cmである。小穴間は芯々でP1～P2は1.14m、P2～P3は1.20m、P3～P4は1.3m、P4～P6は1.3mとSA418に比べ狭い。出土遺物なし。

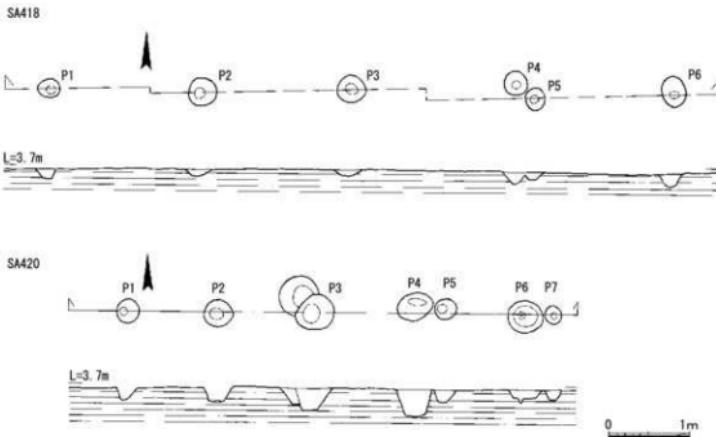


図94 SA418, SA420 (1/60)

## (3) 土坑

### SK401

調査区の北側に位置する。北方約1mにSA418が北方約4mにはSK403、SK409が西方約5mにはSB405がある。平面不整円形で断面逆台形である。坑底は平坦か傾斜をもち、周壁はやや急に立ち上がる。規模は長径85cm、短径77cm、深さは30cmである。埋土はレンズ状堆積であり、4層に分層できた。1層は黒褐色土、2層は褐色砂、3層はブロック状で黄褐色砂、4層が最下層で黒褐色土である。坑底からほぼ完形の土器6点と径約15cmほどの石材が出土した。

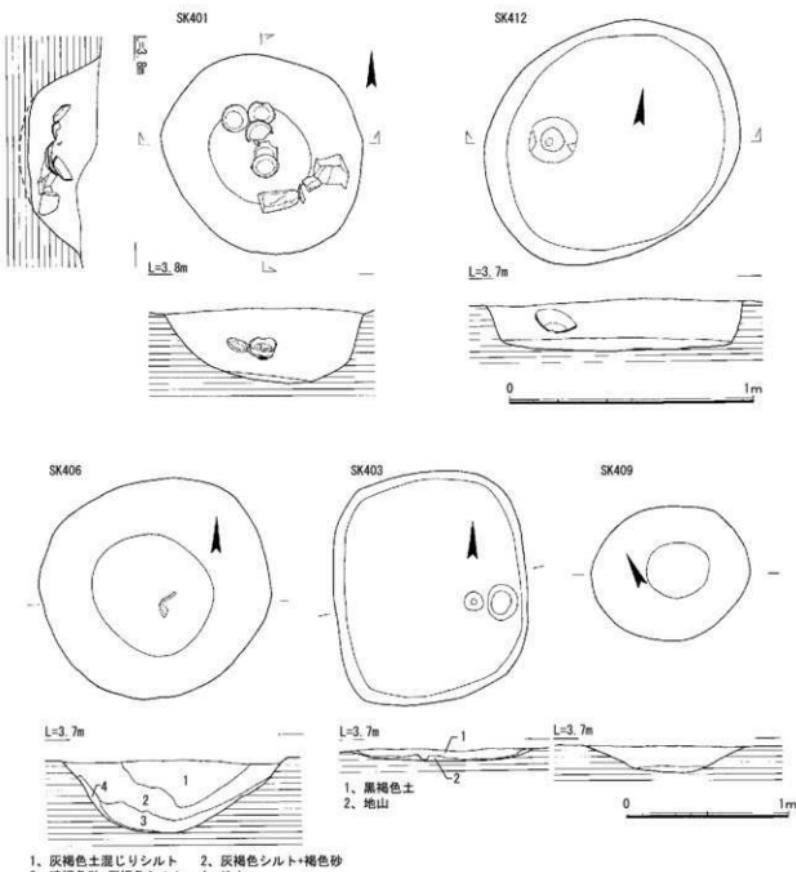


図95 SK401・403・406・409・412土坑 (1/20, 1/30)

#### 出土遺物

1を除き他はほぼ完形品の土師器杯3類である。3を除き他の個体は体部と底部の屈曲があまい。大きさは口径が11.3~12.0cm、高さは6が2.8cmとやや低めであるが、他は3.4~3.6cmと近似している。2区SD256出土資料と比較すると、新しい特徴を持ち、上層資料中に2点同一の特徴をもつものがあることからSK401はSD256が埋没してしまう直前の時期の遺構であろう。

#### SK403

調査区の北側に位置する。南方約4mにはSK401が、西方約1.3mにSK409が、東方約4mにはSB405がある。平面隅丸長方形で、規模は長径1.4m、短径1.2m、深さは7cmである。上部が削平されており遺存状態は悪い。埋土は黒褐色土である。出土遺物は土師器細片1と須恵器細片1のみである。

## SK406

調査区の中央に位置する。他の土坑とは離れ単独で存在する。北方約15mにはSK403、SK409が、北西約6mにはSB404がある。平面不整円形で断面描り鉢状である。周壁は緩やかに立ち上がる。規模は径約1.4mである。埋土はレンズ状堆積であり1層は灰褐色土混じりシルト層、2層は灰褐色シルト層と褐色砂の混合土、3層は暗褐色砂で2層に土器を包含する。埋土中から土師器の大形鉢が出土した。

### 出土遺物

7は土師器大形鉢である。口縁部から胴部にかけて約1/5残存する。復元外径25.6cm。体部外面煤付着。口縁部外面はナデ、胴部外面は不定方向のハケ、口縁部内面はナナメハケ、胴部内面はヘラケグリのちナデ。大形鉢の出現は5世紀後半であり、SK412出土高杯を参考にして5世紀後半と考えても良いだろう。

## SK409

調査区の北側に位置する。東方約1.3mにSK403が、西方約3mにSB402がある。平面椭円形で断面逆台形である。坑底は平坦気味で周壁は緩やかに立ち上がる。規模は長径98cm、短径83cm、深さは17cmである。出土遺物は須恵器片1のみである。

## SK412

調査区の南側に位置する。東方約5mにSK414が、北東約34mにSK406がある。平面不整円形で断面逆台形である。坑底は平坦面が広く周壁は急に立ち上がる。規模は長径113cm、短径90cm、深さは21cmである。埋土は黒褐色シルト層1層である。坑底からやや浮いた状態で土師器高杯杯部が出土した。

### 出土遺物

8は土師器高杯の杯部である。口径外径17.3cm。杯底部と口縁部の境の稜は比較的明瞭に残る。口縁部はわずかに外反する。杯部はやや深めである。口径に対して杯部が深いことなどから5世紀後半か？

### (4) 溝跡

## SD411

調査区の北西隅から西側壁面にかけてと調査区南側で検出した。調査区の二箇所で検出した溝はつながっていないため同一溝であると断定できないが埋土、出土遺物が類似しているため同一溝であると考えた。であるならば調査区内を蛇行する溝になる。

溝幅約6m、深さ約1.1mを測り、蛇行し形態が一定しないことから自然流路と考えられる。埋土は大きく3層に分層できる。上層は黒褐色粘質土や暗灰黄色砂質土である。近世の陶磁器や近・現代の瓦片などが出土している。中層は黒褐色粘質土や黑色粘質土で陶磁器や土師器、須恵器片が出土している。下層は黒色粘質土と黄灰色細砂の混合層やオリーブ黒色砂質土である。最下層からはローリングを受けた土器細片で時期は古墳時代後期や中世末の土師器底部片などが混じる。これらのことからSD411の時期は明確に特定できないものの、近世～近代に埋没した流路と考えられる。

## SD407、408、410、415

調査区の中央から南半部にかけて東西方向に走る。四本の溝は近接しており形態が類似する。断面はレンズ状で、深さは10cm～30cmである。埋土は暗褐色砂質土や灰褐色砂質土でSD407から土師器、須恵器片が数点出土しているだけである。人為的な溝とは考えられず自然に形成された落ち込みと思われる。

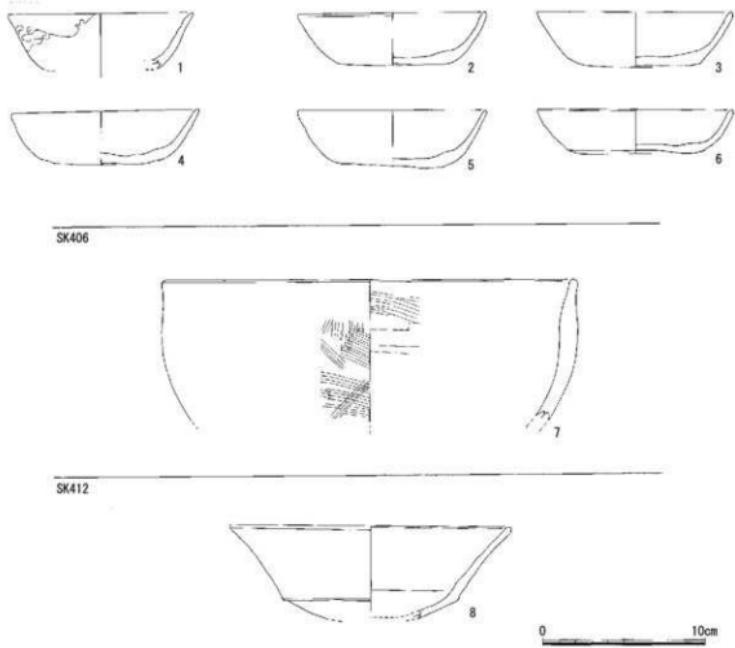


図96 SK401・SK406・SK412出土土器 (1/3)

表30 1区・4区出土土器観察表 \*復元値は( )

拂団番号	登録番号	調査区	出土地点	種別	器種	残存部位	法量(cm)		色調		胎土	備考
							器高	口外(底)径	外器面	内器面		
11-1	06000081	1区	R-2, 3層	洗生土器	黒色土器	底部	(4.7)	(8.9)	灰白色	黒色	15mm以下の砂粒混入	
-1	00002918	4区	SK401No5	土師器	杯	口縁部～底部	3.4	11.3	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	細砂粒少量混入	
-2	00002919	4区	SK401No2	土師器	杯	口縁部～底部	3.3	11.6	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	細砂粒少量混入	
-3	00002920	4区	SK401No6	土師器	杯	口縁部～底部	3.4	12.0	浅黄橙色	浅黄橙色	細砂粒少量混入	
-4	00002921	4区	SK401No4	土師器	杯	口縁部～底部	3.4	11.5	浅黄橙色	浅黄橙色	細砂粒少量混入	
-5	00002922	4区	SK401No1	土師器	杯	口縁部～底部	3.6	11.6	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	細砂粒少量混入	
-6	00002923	4区	SK401No3	土師器	杯	口縁部～底部	2.8	12.0	暗灰黄色 黒褐色	黒褐色	細砂粒少量混入	
-7	00002925	4区	SK406	土師器	大形鉢	口縁部	—	(25.6)	黒色	にぶい 黄橙色	1mm前後の 砂粒混入	焼付着
-8	00002924	4区	SK412	土師器	高杯	杯部	—	17.3	にぶい 黄橙色 黒色	にぶい 橙色	1~2mmの 砂粒混入	

## VIII 総括

### 1.まとめ

#### (1) 遺構について

2区～4区の遺構は地山面である黄褐色砂上が検出面となる。しかし、遺物を含まない浅い溝状のくぼみ（SD407等）（黒褐色砂）が帶状に延びており、遺構はSD407等埋没後に築かれている。SD407等については時期が不明であるが、かなり早い時期に埋没したものと思われる。また標高が高い北側の遺構ほど削平を受け浅くなっている、北側の調査区外については、遺構は遺存状況が悪いものと思われる。特に4区は全体的に削平が著しい。

1区はピットが数基見つかっている。黒褐色粘質土が遺構面となっている。

2区の遺構はピットと小規模な土壙が中心である。掘立柱建物跡は4棟見つかっており、規模は2×3間とあまり大きくなり、並びに規格性も見られない。古墳時代の土壙1基が見つかっており、SD256から遺構と同時期の遺物が多く出土している。上層水田跡は鍵層となるコモ層の残りが悪かったため、畦畔は高さ1～5cm程度であった。調査区の西側はコモ層が分布しておらず、水田跡を確認できていない。水田面と同レベルから中世の土師皿が出土していることから、同時期に開発が行なわれ、削平された可能性がある。上層水田跡からは遺物が出土しておらず、時期特定は難しいが、上限は同じコモ層に覆われたSD256の最も新しい土器は大宰府編年Ⅶ～Ⅸ期（以下〇期は大宰府編年）に属する黒色土器碗である。下限は水田跡の床土中からⅢ～Ⅳ期に属する須恵器碗が出土していることから、上層水田跡の時期はSD256の遺物の出土数が最も多いⅢ～Ⅵ期に属する可能性が高い。下層水田跡は杭が多数打ち込まれた畦畔が確認されており、5世紀代に属する。水田の下層からは自然流路の埋没過程で投げ込まれた土器集中遺構（SX246）が築かれしており、弥生時代後期後半～終末期の遺物が多く見つかっている。

SD256は古墳時代後期～大宰府編年Ⅶ～Ⅸ期の遺物が出土している。SD256の機能した時期には二つの可能性があり、一つは遺物の示す時期幅を溝の存続期間という考え方であるが、砂堆の落ちかけの流路がこれほど長期間に渡り埋没していないことには疑問も残る。しかし掘り返した跡もないことから、長期間安定して溝状の窪地として存在していた可能性がある。もう一つは古代に古墳時代の遺構を破壊し、遺物を流路に投げ込んだことである。古墳時代後期の残りの良い遺物が集中していることからもその可能性が考えられる。埋土はコモ層を境に下層と上層に分かれているが明確に時期を分けることはできない。しかし傾向としては、下層に古墳時代後期以降の遺物が出土し、上層からは古手の遺物の出土量が少ないことがいえる。これらから少なくともSD256から図61-268や図54、図55のような5世紀代～7世紀代の遺物が出土していることはSD256の北側に広がる砂丘微高地に当該期の遺構があったことが伺える。SD256は自然地形説が有力であるが、図9の空中写真にみられるよう、砂丘微高地の縁辺部を走っており、人为的に掘削された可能性も残る。その掘削時期は埋土中出土遺物から推定できようが特定できない。SD256の南側の低地部は5世紀代から開発され水田化され、古代の水田も検出した。人为的な溝と考えるならば水田経営に関わる水路などの役目を果たしていないだろうか。

3区は調査区が狭いため遺構については全体が分かるものは少ない。掘立柱建物の認定は困難だが5棟確認した。建物配置に規格性はみられない。ピットが中心であり、切り合いが激しい。3区周辺は遺構が密集している可能性が高い。

4区は前述のとおり遺構の遺存状態が悪く、遺構の深さは0.2m程度である。掘立柱建物跡を3棟検出して

いるが、何れも調査区外に延びているため規模については不明である。調査区外に遺構の中心があると思われる。建物の並びには規格性があり、中原遺跡の遺構の中では最も整然と並ぶ。時期特定は難しいが、古代の須恵器片が出土していることから、古代に属すると思われる。

## (2) 遺物について

遺物は2区以外からはほとんど見つかっていないが、1区からは残りのよい黒色土器碗が出土している。4区からはSK401からⅦ～Ⅸ期の土師器杯が一括で出土している。

2区では5世紀代の下層水田のさらに下層から東西方向に蛇行して幅2～3mの自然流路が2条流れる。砂丘を浸食してきた流路であり東に向かって低くなる旧地形を反映している。この自然流路の比較的狭い範囲に弥生時代終末の土器が多量に出土した。集落で使用した土器の投棄であろう。出土土器には器種に偏りがみられ粗製の器台形土器（支脚）が最も多く約半数を占める。次ぎに壺が多く、高杯、鉢、壺などもみられる。特に比熱した器台形土器（支脚）の多さは特徴的である。壺は煮沸具であり器台形土器（支脚）はその補助具であることなどから煮沸機能をもつ器種が極めて多いことが特筆される。

調査区の北半部を北東から南西方向に向かってながれる流路であるSD256からは土器や木製品など多量の遺物が出土している。前述のとおりSD256下層の地山直上から古墳時代後期（TK43～209併行期）の須恵器杯の良品が多く見つかっており、2区の利用が本格化した時期が分かる。同時期以降の遺物は時期的に継続しており下層を中心に見つかっている。遺物の出土量が多くなるのはⅡ期以降である。特にⅢ～Ⅵ期の遺物が中心となる。Ⅶ期以降の遺物は出土量が極端に少なくなる。出土した土器のほとんどが須恵器と土師器の杯と碗等の供膳具である。古代に属する他の器種は出土量が極端に少ないことは特徴として挙げられる。また2区の遺物を代表する墨書き土器もⅢ～Ⅵ期のものが中心である。その中でも「林少領」「館院」等の官職や官衙を連想させる墨書き土器はⅤ～Ⅵ期に多い。硯は1点を除き転用硯であり、Ⅱ～Ⅳ期のものである。把手付中空円面硯は流路の路肩から出土しており、Ⅰ期にさかのほる文字関係資料として貴重である。この他重要な土器として灰釉陶器若しくは他地域（北部九州以外）産の須恵器や包含層中であるが白磁I類が出土している。

木簡は2点出土しており、1号木簡は下部が欠損しているが、記載内容が分かれる貴重な例である。記載内容が分かれる貴重な例である。判読した「大村」「川部」「日下部」は史料に登場する地名や人名である。「大村」は延喜式に記載される大村駅であり、その所在地は唐津市浜玉町五反田の大村神社周辺であることが確定できた。木製品は挽き物や曲げ物の他にも容器が多く出土している。遺存状態は良く、目跡等の調整痕も残存している。また、木製鞍や木製鎧や木簡の出土は馬を利用した流通・通信活動を予想させる。さらに、中原遺跡出土の木製品全体の傾向からみると2区は農具の比率が高いことが言えよう。このことは2区から3区にかけての集落は農業などの生産活動を営む傍ら官衙的な機能ももつと考えられる。2区と4区について遺構と遺物から遺跡の性格を考えると、文字関係資料の量や建物の配置から、一般的な集落とは考えにくいため、官衙や在地の首長層に関連する施設の周辺部にあたる可能性が考えられる。しかし古代の中原遺跡は来年度以降に刊行する5区と7区が中心であるため、詳しい遺構や遺物の検討は来年度以降の課題として残される。

## 2. 肥前国松浦郡の交通路と官衙

—中原遺跡の解釈をめぐって—

小松 謙

### (1) はじめに

肥前国松浦郡は現在の佐賀県唐津市、東松浦郡、西松浦郡、長崎県平戸市や五島列島、佐世保市などを範囲とする極めて広い面積をもつ郡である。北は玄界灘、東は筑前国、南は小城郡、杵島郡、彼杵郡と接する。日本の中で最西端に位置し、玄界灘を挟んで朝鮮半島に最も近いという地理的の環境である。

松浦郡の古代行政組織は『肥前国風土記』・『延喜式』・『和名抄』などによって知ることができる。『肥前国風土記』には郷11所と値嘉郷が記され『和名抄』には庇羅、大沼、値嘉、生佐、久利の五つの郷名がみえる。このうち庇羅郷は長崎県平戸市に、値嘉郷は長崎県五島列島小値嘉島（北松浦郡小値嘉町）に、生佐郷は佐賀県唐津市相知町伊岐佐に、久利郷は佐賀県唐津市久里に想定され11郷のうち4郷は比定地がある。里は『肥前国風土記』に26所と賀周里が記される。賀周里は唐津市見借に比定するのが一般的であり、駅名でも賀周駅が登場する。駅は『肥前国風土記』に5所と逢鹿駅と登望駅が、『延喜式』で磐水、大村、賀周、逢鹿、登望の5駅名が記される。烽は『肥前国風土記』に8所と褶振烽と値嘉郷3所との記述があり、その他の地名として鏡渡、大家嶋がみえ、その由来について述べられている。このように史料により、松浦郡内の地名や駅家名はわかるものの、発掘調査により古代の道路跡や駅家跡は確認されておらず、駅路の復元は延喜式の駅家を現地名をもとに比定し、それを結び駅路の復元を行うという方法であった。

ところが近年、唐津市千々賀古園遺跡や中原遺跡など古代の官衙的な遺跡の調査が実施され、遺跡の評価をめぐって駅路など古代の交通について考える必要ができた。本文ではまず近年の調査事例をもとに、既往の研究を元に主要交通路の復元を行う。それにあたっては道路構造の調査例がないため古代の主要遺跡と弥生・古墳時代の遺跡の分布を参考にする。

表31 資料による松浦郡の古代行政組織

史料	郷	里	駅	烽	その他
肥前国風土記	11所 値嘉郷	26所 賀周里	5所 逢鹿駅 登望駅	8所 褶振烽 値嘉郷3所	鏡渡 大家嶋
延喜式		磐水 大村 賀周 逢鹿 登望			
和名抄	庇羅 大沼 値嘉 生佐 久利				

古代の交通を考える上で、古代以前の地域社会とその交通路を加味することはいうまでもなく重要なことであろう。そして松浦郡の代表的官衙遺跡である千々賀古園遺跡・中原遺跡の出現意義を水上交通、陸上交通とからめて考えてみたい。

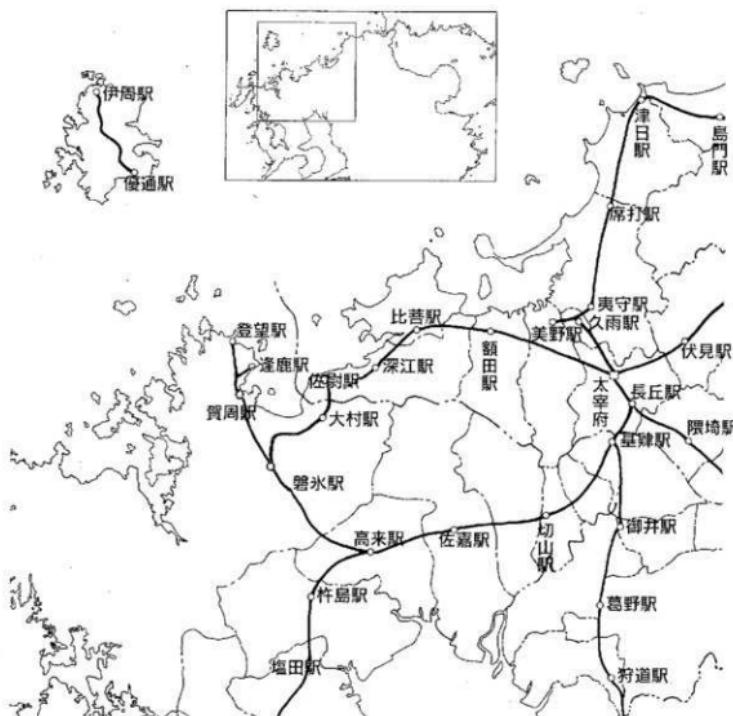


図97 駅路想定図

## (2) 駅路の研究抄録

松浦郡内において古代の道路跡は発掘調査および航空写真による道路痕跡など確認されておらず、地名などによる路線の比定もなされていないのが現状である。唯一、唐津市戸木町と多久市境にある篠原峠に道路状の切り通し遺構がある。原田重和氏が発見され、木下氏が紹介されている。これは国道203号線の東北、JR唐津線のトンネルよりさらに東方の尾根筋にみられる幅8~9mの切り通しである。佐賀平野の吉野ヶ里町島の隈や神埼市吉野ヶ里遺跡にみられるような直線的な切り通しではなく蛇行している点が疑問である。切り通しの肩部には石塔数基がみられた。ただし、小城郡高来駅から松浦郡磐水駅の間は篠原峠付近を通過するの間違いないと思われる。

駅路の研究は肥前国屬十記や延喜式に記載される駅家の比定によりそれを結んで路線を推定するとい

う歴史地理学的方法であった。松浦郡に置かれた磐氷駅、大村駅、賀周駅、逢鹿駅、登望駅の5駅の比定地について述べる。

小城郡高来駅から前述の笹原岬を通過して次駅は磐氷駅である。その比定地は『地理志料』では巣木町岩屋、井上通泰氏は巣木町巣木付近、吉村茂三郎氏は唐津市石志、木下良氏は唐津市相知町相知付近を比定地にしている。5駅の中で最も比定地が定まらなく、地名的にも発掘調査による遺跡の想定もできない。しかし、多久市から唐津市に向かう交通路の巣木から唐津市石志あたりのどこかという絞り込みは可能である。

大村駅は長崎県大村市大村に比定する説が多い。これに対して唐津市浜玉町の大村に比定したのは、吉村茂三郎、松尾楨作、井上通泰などである。大村は浜玉町東北部の五反田周辺の地域をさす。その地域に鎮座する大村神社は藤原広嗣を祀り、境内から布目瓦が出土し奈良時代の寺院跡と推定されている。中原遺跡では「大村」が書かれた木簡が2点出土しており、大村駅は浜玉町五反田の大村神社付近と確定できよう。

賀周駅は唐津市見借に比定するのが一般的である。見借は佐志川の上流にあたる。肥前国風土記に土蜘蛛海松櫛の説が記される賀周里と同所と考えられ、その地を猿田彦神社がある見借と考える。

逢鹿駅は地名の読みから唐津市相賀に比定されることが多い。風土記の「駅の東の海に鮑、螺、海藻、海松等あり」の記事と合致する。

登望駅は唐津市呼子町小友や同町殿浦など、呼子町周辺に比定する説が多い。風土記の「駅の東と西の海に鮑、螺、鰐、雑の魚、海藻、海松等あり」の記事とも合致する。これらの比定された駅を結び路線を推定すると磐氷駅から大村駅へは鏡山の南麓を通過することはほぼ間違いないと思われる。この交通路周辺では近年の調査で古代の製鉄遺跡である岩根遺跡や緑釉陶器、播磨系須恵器、越州窯系青磁などが出土した鶴ノ尾遺跡なども確認された。筑前国の方面から壱岐鷲に向かう路線は筑前国怡土郡深江駅、佐尉駅から肥前国松浦郡大村駅を経由して賀周駅、逢鹿駅、登望駅へと向かうが、大村駅と賀周駅の間に唐津平野最大の松浦川が流れる。松浦川の渡河地点の比定が推定路線を変えることになる。肥前国風土記に記される「鏡渡」をどこに想定するかが問題になる。木下良氏は唐津市鏡を「鏡渡」に比定し、唐津市鏡集落を渡河し和多田先石、元石町、神田中村、西浦を通って賀周駅の比定地である見借へと至るルートを想定している。さらに逢鹿駅と登望駅はともに壱岐鷲への渡海駅として設置されたもので、両駅間の陸路連絡は考えていない。郡衙は肥前国風土記の記すところによれば「鏡渡」の南、鏡山の西、賀周の里と逢鹿の東南、登望の東、大島の東、値嘉郷の北西にあたる地点である。推定地として唐津市柏崎や久里、あるいは千々賀などがある。千々賀では発掘調査によりL字形配置をした大型の建物群や墨書き土器が出土し郡衙候補地である。また、中原遺跡でも木簡、墨書き土器などが出土し有力候補地になった。現在のところ発掘調査による候補地には唐津市千々賀古園遺跡、中原遺跡の2遺跡があるが、両遺跡は松浦川を挟んで両岸に対峙する。前述した鏡渡の比定にも関わる問題であり、これについては後述する。

### (3) 唐津平野の条里

肥前国風土記には郷11所、里26所と書かれ、郷名では和名抄にて庇羅、大沼、値嘉、生佐、久里の五つの郷名がわかり、里名は風土記に賀周里と記される。唐津平野は松浦川流域とその支流沿いに沖積平野が広がる。現在の松浦川は唐津藩初代藩主寺沢志摩守による河川改修工事による河道の付け替えが行われ、それによる新田造成がなされている。従って、松浦川の本流域には古代の条里地割はみられず、

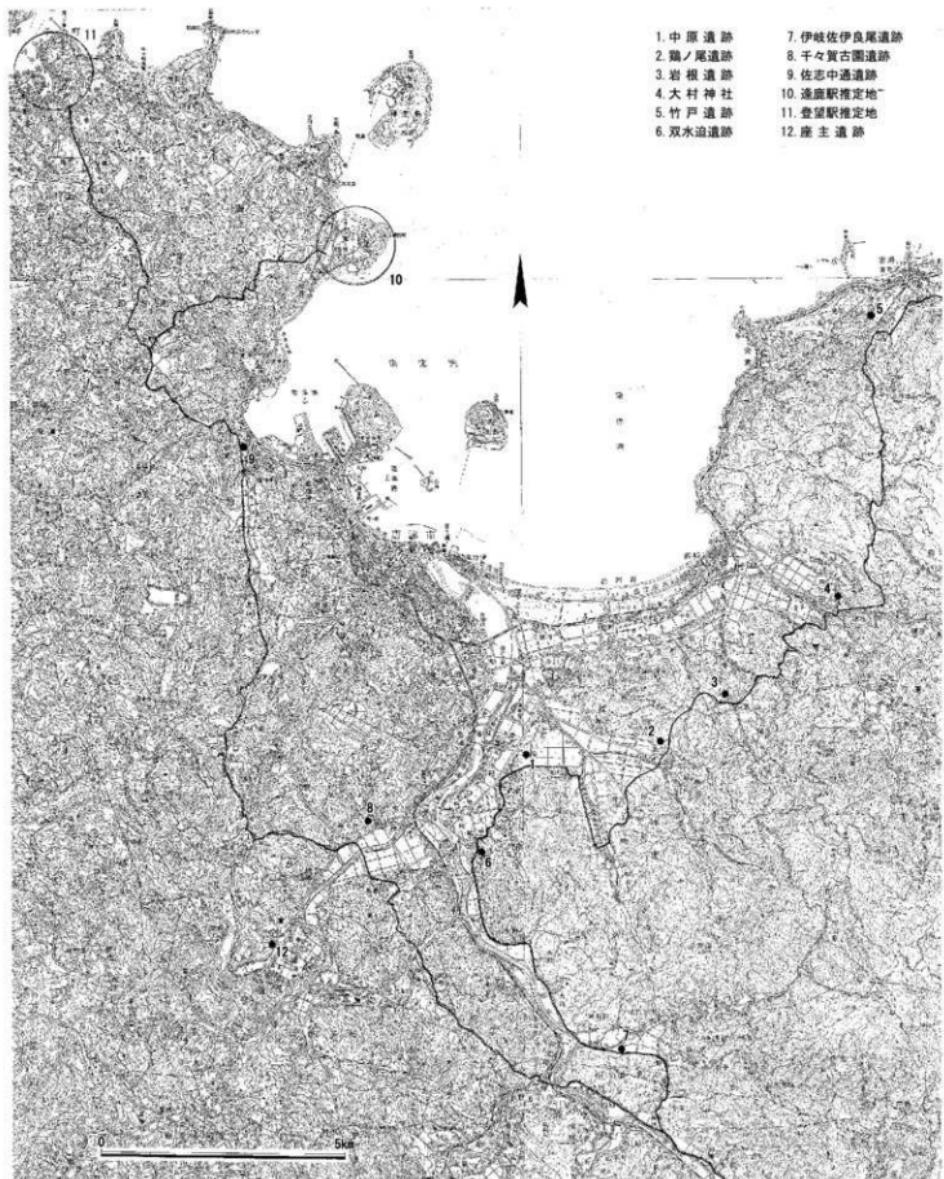


図98 唐津地域の主要古代遺跡と交通路 (1/10,000)

古代においては幾条かの河川とその間の三角州地帯になっていたと思われる。松浦川の支流において条里地割や条里地名がみられる。条里施行範囲が中小河川によって制約されるため、ひとつの流域であっても複数の条里区がみられる。唐津地域において条は不明であるが坪は断片的な字名などとして残っており日野尚志氏による研究があり、引用させて頂く。

宇木川・半田川流域には3つの条里区が認められ、大森川が半田条里区と宇木条里区の区界になっている。大森川以東の半田条里区には半田に「八ノ坪」、鏡に「七ノ坪」の小字名がみられ、半田には「矢作」の小字名がみられる。宇木条里区は大森川と宇木川に挟まれた範囲で、その方位は宇木川流路と同一である。「四ノ坪、八ノ坪、十二、十五、十六」などの小字名がみられ、西南隅を1ノ坪、東南隅を36ノ坪とする千鳥式である。柏崎条里区は西を松浦川、北を半田川、東を宇木川に限られた範囲で正方位に近い。「八ノ坪」の小字名があるだけ坪並の復元はできない。柏崎条里区内にある中原遺跡では水田跡、溝跡、建物群を確認しているが、水田跡、溝跡は正方位である。4区の大形の建物群も正方位である。

松浦川流域では久里に局地的な地割が認められ、「口ノ坪」の小字名がみられる。

松浦川の支流である徳須恵川流域では4つの条里区がみられる。千々賀条里区は大谷川と山田川に挟まれた範囲に若干の地割が検出でき、「八ノ坪」の地名がみられる。この千々賀条里区に千々賀古墳遺跡はあり、L字形配列の大型建物群の主軸は正方位である。右岸では石志条里区と山本条里区がある。地割界は旧2村境をながれる小川になっている。山本条里区には「三ノ坪」、石志条里区には「八ノ坪、二ノ坪」の小字名がある。

唐津市北波多の徳須恵条里は徳須恵に「佐（三）ノ坪、四ノ坪、五ノ坪、六ノ坪、九ノ坪、十ノ坪」竹有に「三ノ坪」がみられる。坪並は東南隅を1ノ坪、東北隅を36ノ坪とする千鳥式である。

町田川流域の町田条里区では神田に「五ノ坪」があるのみである。佐志川流域の佐志条里区では見借と佐志の境付近に局地的な地割がみられる。支流の中代川の流路と一致する。

以上のように唐津平野は狭隘な地形であり、条里も中小河川に制約された局地的である。条里などから直線道の痕跡を見いだすことはできないが、条里が施行された地域にはそれぞれ古代の遺跡が分布しており、郷や里に比定できよう。

#### （4）松浦郡の主要交通路

駅路である古代官道は両側溝を供えた大規模で、最短距離を指向するため直進的であるという特徴をもつ。そのため佐賀平野などのように条里の基準線になる場合もある。松浦郡では空中写真や地名などによる歴史地理学の方法による路線も示されておらず、発掘調査により道路痕跡が確認された事例もない。駅家と思われる遺跡も皆無である。従って駅路の推定というより主要交通路の復元といったほうがふさわしいだろう。

松浦郡の交通路の特色は玄界灘に浮かぶ壱岐島、対馬島を経て朝鮮半島に繋がることにある。そこには海上交通と津が必ず存在し、その施設は国家にとっても重要なものであったことは十分想像できる。広大な松浦郡でも駅路が施行されたのは松浦郡東部地域だけであり、松浦郡内の島々にある庇羅郷や値嘉郷とは海上交通により繋がる。鴻臚館出土木簡に「庇羅郷伊支須一斗」の文字がみえる。庇羅郷は平戸市に比定でき、伊支須は天ヶサのことと、海上交通によって運搬している。その途上、唐津湾を通過していることは確実である。

貞觀四年（862）九月、真如法親王は徒僧とともに前年十月より同年にかけて松浦郡柏島（神集島）で唐通事張支信に命じて造らせた船により入唐した。また天慶八年（945）七月二十六日に呉越船が一隻柏

島に着船した。延久四年(1072)三月十五日に奈良大安寺僧成尋が宋船頭曾聚の船で呼子加部島より入宋し後、彼地で没した。などの記事もみられる。このように東松浦半島や唐津地域は半島・大陸交通の要所であり津が利用されたと想像される。松浦郡の海上交通は対外交渉や国内の交通においても重要な位置をしめていた。

唐津地域において今までのところ直線道の痕跡は認められず、地形の制約などから敷設されなかつた可能性が高い。とすれば律令期の交通路は弥生・古墳時代のそれを基本的に踏襲したことになる。

松浦郡の駅路は筑前国方面へ向かうルートと肥前国小城郡を通過して肥前国府へと向かうルートがあり、二本のルートは交差して一本になり、壱岐島へと渡海するルートになる。図2に駅路をみえた主要交通路案を掲げる。主要交通路を推定するにあたって、古代の主要遺跡を図中におとし、旧地形と弥生、古墳時代の遺跡の分布に留意した。唐津平野には松浦川が流れ、その渡河地点をどこに設定するかが問題になる。「鏡渡」をどこに比定するかという問題である。地名などから鏡集落に比定し、松浦川の対岸である和多田先石へ渡河するという説がある。その場合、松浦川左岸側に古代の主要遺跡が見いだせず、わずか唐津市神田の菜畑内田遺跡の墨書き土器1点である。また渡河には舟を利用せざるをえなく松浦川の河川改修を併せて考えてみても久里より河口側では舟運による渡河しか考えられない。唐津地域において官衙的性格を持った遺跡は千々賀古園遺跡と中原遺跡がある。両者の立地をみると松浦川左岸に千々賀古園遺跡が松浦川右岸に中原遺跡があり、両遺跡とも松浦川の水運を利用した遺跡と思われる。さらに、駅路上の位置は筑前国からの窓口に中原遺跡が、壱岐島からの窓口に千々賀古園遺跡がある。両遺跡の近くに駅路といわむしも主要交通路があったことは想像できる。とくに中原遺跡からは荷札木簡が出土していることはその証拠にもなる。両遺跡とも郡関連の官衙であり、松浦川を挟んで対峙する。両遺跡の通信や物資の輸送手段は松浦川の水運を利用するのが最も有効である。陸路を使うと遠路になる。「鏡渡」は中原遺跡と千々賀古園遺跡の間の松浦川の渡しであると考えたい。松浦川の水量は多く、かっては石炭の輸送も船を使用していた。干満の潮を利用すれば容易に両遺跡間の渡しは可能である。

中原遺跡 - 千々賀古園遺跡間を「鏡渡」と想定し、小城郡へ向かうルートを推定してみる。中原遺跡から南下して松浦川右岸の古代の主要遺跡には久里双水迫遺跡、唐津市相知町伊岐佐伊良尾遺跡がある久里、伊岐佐とともに松浦郡の郷「久利」「生佐」の比定地であり主要交通路が通過していたと思われる。

一方松浦川左岸では千々賀古園遺跡より南では主要な古代遺跡は見あたらない。ただし、唐津市相知町と唐津市北波多の旧町・村境が約1kmにわたって一直線になる箇所が見受けられる。相知町坊中と北波多芳谷の境界である。近くには岸嶽城もあり、中世において交通の要所でもあった。この直線の境界を道路痕跡と推定し、さらに南下すれば相知町山崎で松浦川を渡河することになる。筑前国方面からの路線と壱岐島方面からの路線の交差点は相知町の千束付近が予想される。現在のところ、古代の遺跡は発見されていないが、相知の語源は「逢う地」である。中・近世のみならず古代にさかのぼって「逢う地」であったのではなかろうか。さらに憶測の域をでないが磐水駅を唐津市相知町横枕～千束付近に想定する。

肥前国慶長絵図（鍋島報效会蔵）によると慶長期の主要交通路は佐賀市から多久市を経由し唐津市に向かう場合は基本的に国道203号線と重なる。異なる路線は唐津市相知町町切で嚴木川を渡河して、相知町田頭、横枕、中山、山崎と嚴木川の右岸を通る点である。国道203号線は嚴木川の左岸を通るが、中・近世においては田頭、横枕、中山を経由する道路が主要幹線であったことが判る。

## (5) 主要交通路と官衙

駅路は肥前国小城郡から松浦郡にはいると相知町千束付近で筑前国方面へむかう仮称「筑前ルート」と壱岐島方面に向かう仮称「壱岐島ルート」に分岐する。この筑前ルートと壱岐島ルート上に古代の主要遺跡がある。これらの遺跡は奈良～平安時代の中でも、その盛期には時期差がある。これは対外交渉の変化や交通路の変化などの影響が想像できる。次にこれらの遺跡について述べる。

### ① 築前ルート

唐津市相知町伊岐佐伊良尾遺跡、久里双水追遺跡、中原遺跡、鶏ノ尾遺跡、岩根遺跡、古代寺院と想定される大村神社がある。

伊岐佐伊良尾遺跡の所在する相知町伊岐佐は和名抄に記される生佐郷に比定される。伊良尾遺跡は右伊岐佐川と伊岐佐川が合流する地点の左岸、標高12～14m付近の河岸段丘上に位置する。検出された遺構は掘立柱建物跡9棟、柵列7条、鍛冶炉3基、土坑がある。鍛冶炉と建物群の一部は10世紀中頃～後半である。7世紀末～8世紀代の遺構には土坑6基があり、遺構・包含層からも8世紀代の須恵器が出土している。

久里双水追遺跡は松浦川右岸、夕日山系の西麓に派生した低丘陵端部に立地する。1981年に唐津市教育委員会によって調査されたが詳細不明である。古墳時代後期～平安、鎌倉時代の集落で、奈良時代の集落も確認されている。

中原遺跡は松浦川右岸の砂丘微高地で現河口から約4kmに位置する。1999年から佐賀県教育委員会により調査が実施され、木簡や墨書き土器が多く出土した流路や溝跡、掘立柱建物群や水田跡を検出した。官衙的な遺物には木簡、墨書き土器、中空円面鏡、転用鏡、鍔帶金具、綠釉陶器、奈良三彩、製塙土器、曲物、挽物などがある。8号木簡には「甲斐國□戌□」の文字がみえ、国内初の防人関連の出土文字資料

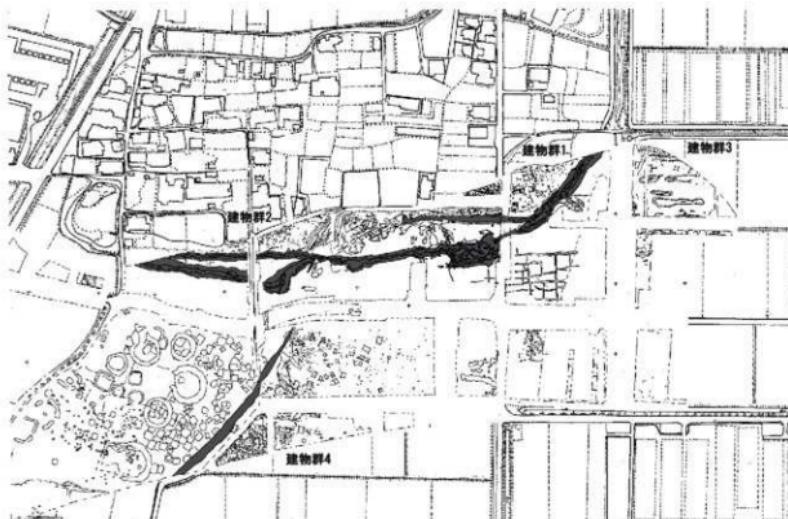


図99 中原遺跡遺構配置図

になった。1号・3号木簡の二点からは「大村」が確認され、延喜式にみえる大村駅を、大村神社のある唐津市浜玉町五反田付近に求める説を裏付けた。墨書土器では「林少領」があり、郡閥連施設があったことがわかる。流路と併行して直線的な溝が二条掘削される。直線溝は他の自然流路と連接して、あたかも区画を形成しているかのようである。建物群2が分布する区画は調査区外の地割などから方1町であることがわかる。遺跡内の建物群は4群からなる。このうち建物群3の掘立柱建物は柱穴や建物の規模が他の建物群より大きく主軸は正方位に向く。建物群の中では最も新時期に位置づけられる。また、建物群4の区域内からは輪の羽口4点と鉄滓約30点がある。9-2区からも羽口や鉄滓が比較的の出土しており鍛冶関連遺構の存在も考えられる。

また、本遺跡は旧松浦川岸に立地し、木製の鞍や木製鎧数点が出土していることなどからも交通の要所であることが伺える。遺跡の盛期は8世紀後半～9世紀前半である。

鶏の尾遺跡は鏡山南麓裾部に立地する。調査区内から建物群は確認できなかったが2つの遺物集中地點がみられ、椀、杯、皿、蓋などの土師器の食膳具と壺などの煮炊具とともに縁軸陶器、西播磨系須恵器碗、越州窯系磁器などが出土した。鍛冶炉1基と炭窯15基も検出した。遺跡の盛期は9世紀後半～10世紀前半である。

岩根遺跡は鏡山東麓から派生する丘陵裾部に立地する。9世紀代の製鉄関連遺跡である。遺物の検討の結果、製鉄を主とし一部精鍛冶、鍛鍊鍛冶までも行うことが判明した。時期は9世紀代である。本遺跡でも炭窯は確認されているが、西方約700mの外原遺跡でも炭窯を確認している。

筑前ルート周辺に立地する中原遺跡、鶏ノ尾遺跡、岩根遺跡の古代遺構の盛期は8世紀後半以降であり、むしろ9世紀代を中心としていることが判る。

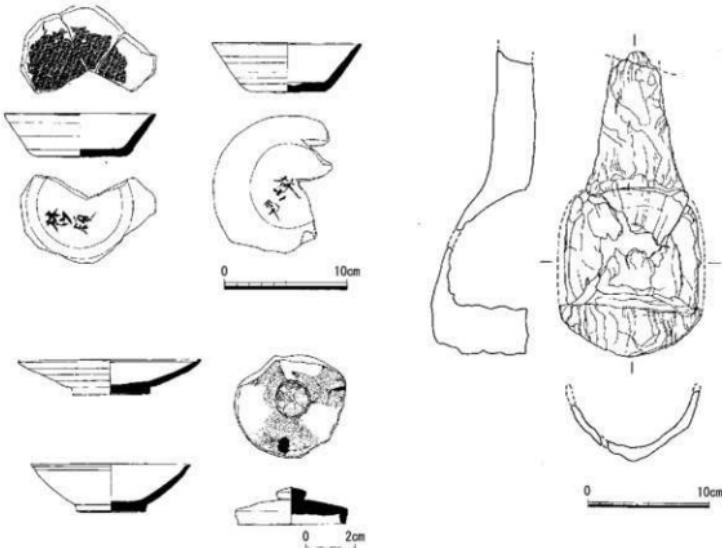


図100 中原遺跡出土遺物

## ②壱岐島ルート

唐津市千々賀古園遺跡、佐志中通遺跡・徳藏谷遺跡がある。

千々賀古園遺跡は松浦川の支流である徳須恵川下流の左岸に位置する。徳須恵川に流れ込む小河川である大谷川が開削した谷部の丘陵先端部に立地する。唐津市教育委員会によって1990年と1995年に発掘調査が実施され、その結果掘立柱建物8棟の他、銅製の天秤受け皿や蛇紋岩製の権や平瓦、墨書き土器95点が出土している。

2次調査区の掘立柱建物3棟はL字形配置である。1号建物は2間×5間、2号建物は2間×4間、3号建物は2間×3間以上の側柱建物で、柱根の径が1号建物は30~35cm、2号建物は25~30cm、3号建物は20~25cmと平面形、柱とともに大型の建物である。ただし、柱間寸法は規格性が高いものの、両桁行で柱筋が通らない箇所もある。この建物群の立地は丘陵の端部であり、丘陵西側を埋め立てたが地盤が軟弱で、コモ層が形成されるほどの湿地であったという地形であり、官衙の政庁とは考えにくい。

出土遺物のうち平瓦は表面に多数の筋状のケズリ痕がある特徴ある平瓦で、同様の瓦が壱岐島分寺で出土している。この瓦は約12km北東にあったといわれる瓦窯跡で焼成したものである。この瓦窯跡は鬼塚川原橋の西側の小規模な谷にあり、旧鬼塚中学校校庭下に埋没している。

墨書き土器は「鷲守」「川部」「田造」「川上」「六」がみられる。「鷲守」は壱岐島守が考えられ、「川部」は中原遺跡出土1号木簡にもみられる人名である。最も多いのは「六」であり次に「川上」が目立つ。須恵器の杯、蓋が多く出土している。時期は8世紀前半~中頃である。

佐志中通遺跡は佐志川の右岸河口付近に立地する。両遺跡とも調査区内では奈良・平安時代の遺構は顕著ではなく、7世紀後半の土坑を検出したのみである。しかし、佐志中通遺跡からは鍍金具や包含層から8世紀前半~中頃の須恵器が出土している。想定壱岐島ルート上にある古代の遺跡は千々賀古園遺跡、佐志中通遺跡のみでありともに8世紀前半~中頃を主とする。

山口亨氏は千々賀古園遺跡をカキメ瓦の出土や「鷲守」「介」などの墨書き土器、続日本紀の天平16年の詔などから壱岐島分寺造営のための積み出し港的な性格をもつとし、国管轄の施設と位置づけている。しかし墨書き土器で「介」は1文字であり、直ちに官職名とするのは疑問である。むしろ「少領」らしき文字が見えることに注目したい。壱岐島分寺造営に関わる遺跡という解釈は良いにしても国管轄の施設というよりむしろ郡管轄の施設と考える。

松浦郡内において主要な官衙遺跡である千々賀古園遺跡と中原遺跡は松浦川を挟んで対峙している。松浦川左岸の壱岐島ルート上には千々賀古園遺跡があり、松浦川右岸の筑前ルート上には中原遺跡が立地する。また、壱岐島ルート上にある千々賀古園遺跡、佐志中通遺跡は8世紀前半~中頃で筑前ルート周辺の中原遺跡、鶴ノ尾遺跡、岩根遺跡などは8世紀後半~9世紀代に盛期があることが判った。最後にこれらの意義についてまとめたい。

## (6) 窓口港の変化

松浦郡の主要交通路は壱岐島へむかう「壱岐島ルート」と筑前国へむかう「筑前ルート」があり、二路線が交差して、松浦郡の南の小城郡、さらには肥前国府へと向かう。この主要交通路は鉄道と考えた方が、道路構造や駅家が確認されておらず鉄道とは断定できない。松浦郡5駅のうち、磐永駅の比定地は最も諸説があり定まらない。小文では壱岐島ルートと筑前ルートが交差して小城へ向かう地点である相知町横枕~千束付近と想定した。

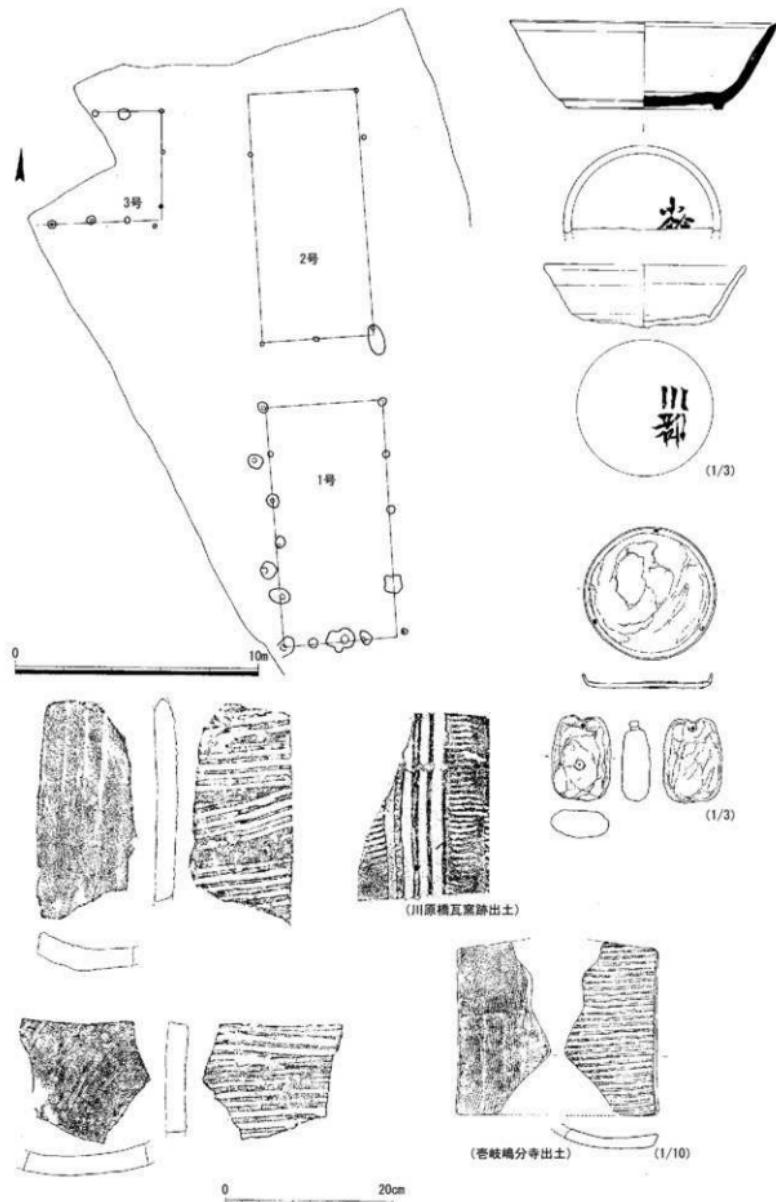


図101 千々賀古園遺跡建物群・出土遺物

賀周駅は地名から佐志川上流の見借とする説が有力であるが、該当する遺跡もみあたらない。佐志川流域では河口に立地する佐志中通遺跡～徳蔵谷遺跡にみられる。佐志中通遺跡からは鍍金具も出土しており、現段階では賀周駅を佐志川下流に求めるのが妥当と考える。これによって磐水駅、賀周駅、大村駅の距離が等間隔になる。

松浦郡の交通路と官衙に関しては千々賀古園遺跡、中原遺跡の解釈が重要である。松浦川を挟んで壱岐島ルート上に千々賀古園遺跡、筑前ルート上に中原遺跡が立地する。千々賀古園遺跡と中原遺跡の間を「鏡渡」と想定し、河川利用の交通を考えた。問題は両遺跡の性格と盛期に時期差があることをどう解釈するかである。性格については成案をもたないが、千々賀古園遺跡が八世紀前半～中頃、中原遺跡が八世紀後半～九世紀前半に盛期があることの解釈を次のように考える。

松浦郡の駅制の窓口は東松浦半島沿岸地の登望駅、逢鹿駅である。とともに水上交通によるため季節や気候、干満などに到着時刻に左右されることが予想でき、直接、佐志川下流の賀周駅にもたらされることがあったかもしれない。ただし、登望駅、逢鹿駅、賀周駅いずれに陸揚げされても必ず千々賀古園遺跡は通過する。すなわち、千々賀古園遺跡あるいはその周辺で物資の受け入れ、再配達、文書の事務などが行われていたのかもしれない。そしてその活動の時期が八世紀前半～中頃であり、それ以降は活動が衰退する。一方、松浦川対岸にある中原遺跡の盛期は八世紀後半～九世紀前半にあり、千々賀古園遺跡が衰退して以降に活動が活発化する。中原遺跡は旧松浦川岸に位置すると思われる。低地部にあたる中原遺跡14区からは弥生時代中期の結合式のヤスが多量に、また石鍤なども出土しており、弥生時代には魚が揚がってくるような河川の地形であり、古代においても同様の地形が予想される。まさしく河川交通と陸上交通の拠点になったのだろう。その証拠に荷札木簡や文書木簡などが約20点出土している。8号木簡にみられるよう防人も配置されているがこれは港の警備や鏡山におかれた烽などの警備にあたったのかもしれない。木製の鞍や木製鎧にいたっては数点出土しており、馬も飼われていたことがわかる。中原遺跡が郡クラスの官衙関連施設であることは確実であり、千々賀古園遺跡が衰退はじめてから盛期を迎える。8世紀前半～中頃までは東松浦半島の登望駅、逢鹿駅、賀周駅を窓口にして千々賀古園遺跡を経由して通信、物資の輸送が行われていたが、8世紀後半以降は直接、松浦川を遡って中原遺跡を窓口にするようになった。その結果、壱岐ルート上の佐志中通遺跡や千々賀古園遺跡が衰退し、筑前ルートの中原遺跡、岩根遺跡などが盛行するようになった。松浦郡は唐や新羅など對外交渉の寄港地あるいは窓口港になるがその港の変更が遺跡の変遷となったと考える。

## (7)まとめ

中原遺跡、千々賀古園遺跡を軸として、主要交通路を推定しその変遷を推定してみた。中原遺跡11区には5世紀代の円墳3基さらには6世紀中～後半には前方後円墳(全長31.5m)が造られ、遺跡内および周辺には首長が居住している。7世紀代には大規模集落とはいわないまでも中空円面硯の出土などから文字を使用した人々が居住していたと思われる。SD256からは6世紀後半～7世紀代の土器が出土しており、5世紀代、8世紀代の水田跡も検出されたことから2区から3区の北側に広がる砂丘高地には5世紀～7世紀にかけての集落があったことが伺える。その集落が盛期をむかえるのは8世紀後半であり、水上、陸上交通の拠点として津(港)の役割を果たしたと考えられる。出土遺物から郡レベルの官衙関連施設があったことは間違いない。同様の遺跡例として「津司」の墨書き土器が出土した金沢市畠田寺中遺跡や「津長」の木簡が出土した福島県いわき市荒田目条里遺跡、新潟県長岡市和鳥村八幡林遺跡などがある。いずれも河口近くの河川沿いに立地し地域支配の拠点となった遺跡である。中原遺跡が8世紀後半～9世紀前半にかけて盛期

をむかえるのは官的な役割を担った在地首長が津(港)を経営し、その結果、本遺跡が水上交通の窓口港となつたのではないかと考えた。

これは中原遺跡をどう理解するかという疑問から始まった。これは仮説であるし、今後の松浦郡内の調査・研究の進展により変更されるかも知れない。ひとつの視点として提示したい。

#### 参考文献

- 松岡史 1962「唐津市史 第二編古代」394頁  
日野尚志 1982「条里」「末盧国」665頁 六興出版  
田島龍太 1982「久里双水遺跡」「末盧国」552頁 六興出版  
蒲原宏行 1986「伊岐佐遺跡群」相知町教育委員会  
木下良 1991「松浦郡の古代駅路(1)(2)」「末盧国105・106号 松浦史談会  
伴耕一朗 1991「千々賀古園遺跡」唐津市教育委員会  
仁坂聰 1997「千々賀古園遺跡Ⅱ」唐津市教育委員会  
小松謙 2002「中原遺跡」佐賀県教育委員会 西九州道建設に伴う発掘調査概報  
平川南 2002「古代における地域支配と河川」「国立歴史民俗博物館研究報告」96  
草場誠司 2003「鶴ノ尾遺跡(2)」唐津市教育委員会  
山口亨 2004「壱岐嶋分寺の造営体制」「小田富士雄先生退職記念論集」

### 3. 移動式竈について

美浦 雄二

2区のSD256から移動式竈の底片が出土している。古代の遺跡では多くの遺跡から移動式竈が出土しているが、ほとんどが底や基部の小片であり、研究が進んでいないのが現状である。そこで今回は佐賀県内から出土している移動式竈について集成と若干の検討を行い、2区から出土した移動式竈の位置づけを行いたい。

#### (1) 研究略史

移動式竈の本格的な研究は稻田氏（1978）から始まっている。移動式竈を付け底系と曲げ底系に大分し、時期的な変遷と地域性について検討を加えており、以後の研究の基本となっている。近年では近澤氏（1992）が全国的な検討を行なっており、現在でもこれを越えるものはない。最近は岩崎氏（2003）、加藤氏（2005）や杉井氏（1998）が地域毎に集成や検討を加えている。

名称はこれまで「竈」「韓竈」「竈形土製品」「竈形土器」「移動式竈」「置き竈」等が使われており、統一された名称はない。今回は杉井氏に従い、造り付け竈と対比させる意味で「移動式竈」を用いる。

#### (2) 分類

分類は稻田氏と近澤氏に従い、焚口の底の形状により大きく二分する。他に掛口端部の形態が内傾するものとそれ以外、端部の肥厚の有無により細分できるが、全形が分かるものが少ないので詳細を検討できた個体は少ない。

I類：付け底系

II類：曲げ底系

#### (3) 変遷について

1期：～大宰府編年I期

2期：II期～VII期

3期：VII～X I

4期：X II～

便宜的に以上の4時期に区分した。出土数が増加すれば詳細に時期的な傾向を見ていく必要がある。

1期に属するものは多くないが、分布の特徴としては渡来系文物が出土している地域（2005）に集中する傾向がある。器形について検討でき、また出土数が多い遺跡は菜畑内田遺跡である。（1）はI類であるが、底が、掛口上端部に接して正面上部だけに付けられており、断面形も三角形をしている。そのためII類をモデルに作られた可能性が高い。同一の遺構から羽釜（鍔釜）が出土しており、羽釜は近畿地方ではII類と組み合っていることから、その傍証となると思われる。その他の個体もI類であり、小さな底が焚口の正面上部だけに付く。他遺跡の例では（5）はII類であるが、底は痕跡程度で僅かに折り曲げてあるだけであり、底としての用途をなしていないかった可能性もある。

2期の例は多く、出土例のはほとんどは同時期の所産である。当該期のものは個体差があまりなく、底が大きく延び出している。II類が1例あり、他はI類である。器形は底の先端の高さが掛口まで延びるが、掛口付近からほぼ水平に延びるものと、焚口付近から上方に延びるものがある。底の下端は基部に接するものが多い。また高さも、30cmを超えるものと25cm前後のものがある。出土遺構は土器が大量に廃棄された土坑や溝から破片で出土したものが多い。

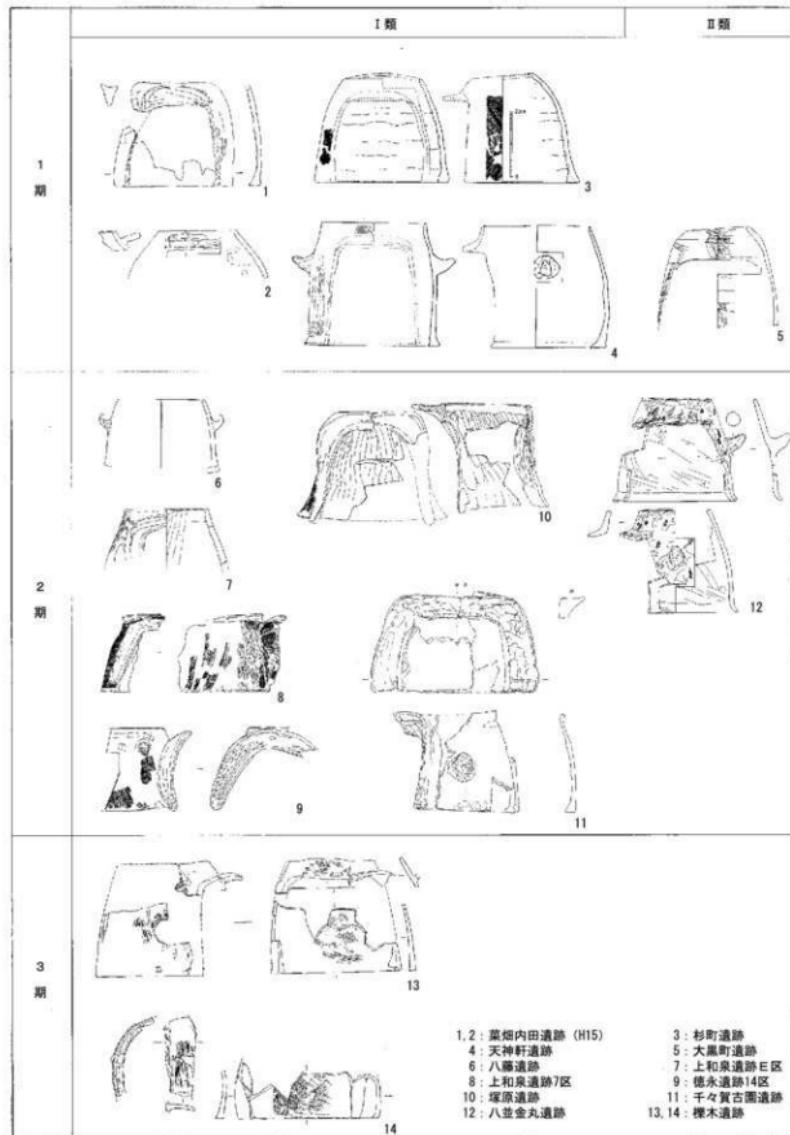


図102 佐賀県内出土移動式竈変遷図 (1/15)

3期の例は少なく不明な点が多いが、(13)の器形は2期の例と大きな変化はないようである。

4期の確実な例は出土していない。小片は出土しているが混入の可能性がある。福岡県内では当該期の出土例があるため今後の調査で出土する可能性はあるが、出土数は少數にとどまるであろう。

表32 佐賀県内移動式竈一覧1

No.	遺跡名	出土遺物	出土状況	時期	部位	底	掛口	団中No.
1	日岸田遺跡	SB037	土師器甕・土師器杯・須恵器	1	掛口～底片	I	肥厚無	
2	本川原遺跡	包含層	—	不明	掛口～底片	I	肥厚無	
3	袖比梅坂遺跡	SH0232	土師器杯・甕・須恵器杯・甕	1	基部片	—	—	
4	八ツ並金丸遺跡	SK7061	土師器甕・須恵器杯・甕	2	ほぼ完形	II	肥厚無	12
5	八幡遺跡9区	SK-912	土師器甕・多数	2	掛口～基部	—	肥厚無	6
6	田手二本杉遺跡	SD001	土師器甕・瓶	1	焚口上部片	I	肥厚無	
7	田手二本杉遺跡	SD006	土師器杯・碗	1	底片	I	—	
8	中國道路Ⅲ区	SE-304	土師器杯・甕・甕・多數・墨書き土器	3	底片	I	—	
9	花手遺跡	SK1007	須恵器杯・土師器杯・甕・木製品	1	—	—	—	
10	塚原遺跡	SK3029	土師器甕・皿・碗・甕・多數	2	ほぼ完形	I	肥厚	10
11	塚原遺跡	SK3076	青磁碗・羽釜・土師器鉢	4	底片	I	—	
12	志波屋二本松(乙)遺跡	SK2002	須恵器甕・豆・土師器甕・刀子・絆縫車	2	基部片	—	—	
13	志波屋二本松(乙)遺跡	SK2002	須恵器甕・豆・土師器甕・刀子・絆縫車	2	焚口片	—	—	
14	八子三本黒木遺跡Ⅱ区	SX2008	須恵器蓋・碗・甕	1?	掛口片?	—	先細	
15	畠田遺跡	SK507	須恵器蓋・豆	2	掛口～焚口片	I	肥厚無	
16	上和泉道路E地区	SD005	土師器杯多・皿・蓋・甕	2	掛口～焚口部	I	肥厚無	7
17	原ノ町遺跡	SK110	土師器杯・網・蓋	2	焚口基部片	—	—	
18	原ノ町遺跡	SK110	土師器杯・網・蓋	2	焚口基部片?	—	—	
19	東高田遺跡1区	SK125	土師器・須恵器蓋・杯・碗・甕・多	2	焚口底片	I	—	
20	東高田遺跡1区	SK125	土師器・須恵器蓋・杯・碗・甕・多	2	底片	I	—	
21	東高田遺跡2区	SH236	須恵器蓋・碗・杯・土師器甕	2	掛口～焚口片	I	肥厚無	
22	東高田遺跡2区	SK237	土師器皿・甕・甕	2	掛口～焚口片	I	肥厚無	
23	東高田遺跡3区	SH355	土師器・須恵器杯	不明	焚口片	—	—	
24	桜木遺跡1区	SK101	土師器杯・碗・黑色土器碗	3	ほぼ完形	I	肥厚無	13
25	桜木遺跡1区	SK101	土師器杯・碗・黑色土器碗	3	底片・基部片	I	—	14
26	牛田寄遺跡	包含層	—	不明	基部片	—	—	
27	御手水遺跡1区	包含層	—	不明	基部片	—	—	
28	都留遺跡2区	SD001	土師器杯多・甕・復縫縫	9C後半	焚口片?	I	—	
29	御手水遺跡2区	SD201	須恵器土師器皿・杯・碗・甕・甕	2~3?	底片	I	—	
30	御手水遺跡2区	SD201	須恵器土師器皿・杯・碗・甕・甕	2~3?	底片	I	—	
31	御手水遺跡2区	SD202	須恵器土師器皿・杯・碗・甕・甕	2~3?	掛口～焚口片	I	—	
31	御手水遺跡2区	SD202	須恵器土師器皿・杯・碗・甕・甕	2~3?	掛口～焚口片	I	—	
32	友直遺跡8区	SE803	土師器杯多・碗・墨書き土器・須恵器杯	2	掛口～焚口片	I	?	
33	西千布遺跡3区	SE3018	土師器杯・皿多・甕・黑色土器碗	2	焚口片	I	—	
34	西千布遺跡3区	SE3020	土師器杯・皿多・甕・須恵器碗・瓦	2	底片	I	—	
35	西千布遺跡3区	SK3090	土師器杯・皿・碗・甕	2	焚口片	I	—	

表33 佐賀県内移動式竈一覧2

No.	遺跡名	出土遺構	出土状況	時期	部位	底	掛け口	国中No.
36	徳永遺跡1区	SD1083	須恵器皿、土師器皿、碗	2~3	底片	I	-	
37	金立遺跡8区	SH18043	土師器碗、杯、皿、蓋、須恵器杯	2	掛け口~底片	I	肥厚無	
38	コマガリ遺跡	SD2225	土師器碗、杯、皿、黑色土器碗	2~3?	底片	I	-	
39	ウ一星敷遺跡	SE1031	須恵器土師器皿、杯多、碗、蓋	2	掛け口片	-	肥厚	
40	ウ一星敷遺跡	SE1003	瓦器碗、青磁碗多	3~4	底片	I	-	
41	牛田寄遺跡10区	SE10127	土師器蓋、支脚、杯	1?	掛け口~焚口片	I	肥厚無	
42	坪の上遺跡3区	SK323	須恵器碗、蓋、土師器皿、甕、鉢	2	基部片	-	-	
43	徳永遺跡10区	SD10035	土師器、黑色土器碗	不明	掛け口片	-	肥厚	
44	徳永遺跡10区	SD10035	土師器杯、皿、高杯多、甕、須恵器甕	2?	底片	-	-	
45	徳永遺跡10区	SD10035	土師器、須恵器杯、碗、皿、蓋多、	2?	掛け口片	-	肥厚	
46	徳永遺跡10区	SD10035	土師器、須恵器杯、碗、皿多	2?	胴部~基部	-	-	
47	徳永遺跡8区	SD8016	土師器杯、瓦蓋、皿、甕	2	掛け口~底片	I	肥厚無	
48	徳永遺跡14区	SK14001	土師器杯、皿	2	底片	I	-	
49	徳永遺跡14区	SK14001	土師器杯、皿	2	基部片	-	-	
50	徳永遺跡14区	SK14001	土師器杯、皿	2	基部片	-	-	
51	徳永遺跡14区	SK14001	土師器杯、皿	2	ほぼ完形	I	肥厚無	9
52	徳永遺跡14区	谷地形2	須恵器杯、土師器杯、龍泉窯	2~4	底片	-	肥厚無	
53	徳永遺跡14区	谷地形2	須恵器杯、土師器杯、龍泉窯	2~4	掛け口~体部	-	肥厚	
54	上相原遺跡7区	SK7004	土師器杯、黑色土器碗多、須恵器碗	2	ほぼ完形	I	-	8
55	西山田天神遺跡	10号溝状遺構	土師器碗	4	基部片	I	-	
56	西山田天神遺跡	21号不明遺構	土師器皿、搖鉢、青磁皿	4	焚口基部片	-	-	
57	杉町遺跡	SK027	单独	1?	掛け口~基部	-	先細	
58	天神軒遺跡	4号土壤	土師器杯、高杯、甕	1	ほぼ完形	-	先細	
59	久蘇遺跡	SD07	土師器杯、横倣杯、高杯、甕	1	基部片	-	-	
60	久蘇遺跡	P17	-	不明	基部片	-	-	
61	柔畑内田遺跡(H9)	SD01	土師器蓋、杯	不明	掛け口~焚口片	I	肥厚無	
62	柔畑内田遺跡(H15)	SX43	土師器杯、横倣杯、高杯、甕泡	1	掛け口~焚口片	I	肥厚無	
63	柔畑内田遺跡(H15)	SX43	土師器杯、横倣杯、高杯、甕泡	1	掛け口片	-	肥厚無	
64	柔畑内田遺跡(H15)	SX43	土師器杯、横倣杯、高杯、甕泡	1	掛け口~焚口片	I	肥厚無	2
65	柔畑内田遺跡(H15)	SX43	土師器杯、横倣杯、高杯、甕泡	1	掛け口片	-	先細	
66	柔畑内田遺跡(H15)	SX43	土師器杯、横倣杯、高杯、甕泡	1	底片	I	-	
67	柔畑内田遺跡(H15)	SX43	土師器杯、横倣杯、高杯、甕泡	1	基部片	-	-	
68	柔畑内田遺跡(H15)	SX43	土師器杯、横倣杯、高杯、甕泡	1	ほぼ完形	I	先細	1
69	柔畑内田遺跡(H15)	SX43	土師器杯、横倣杯、高杯、甕泡	1	基部片	-	-	
70	柔畑内田遺跡(H15)	SX43	土師器杯、横倣杯、高杯、甕泡	1	基部片	-	-	
71	柔畑内田遺跡(H15)	SX43	土師器杯、横倣杯、高杯、甕泡	1	基部片	-	-	
72	柔畑内田遺跡(H16)	包含層	-	不明	掛け口片	-	肥厚無	
73	柔畑内田遺跡(H16)	包含層	-	不明	基部片	-	-	
74	柔畑内田遺跡(H16)	包含層	-	不明	基部片	-	-	
75	柔畑内田遺跡(H16)	包含層	-	不明	基部片	-	-	
76	柔畑内田遺跡(H16)	包含層	-	不明	基部片	-	-	
77	柔畑内田遺跡(H16)	包含層	-	不明	基部片	-	-	
78	千々賀古園遺跡	包含層	-	2	ほぼ完形	I	肥厚	11
79	久里天園遺跡	-	-	不明	掛け口~焚口片	I	肥厚無	
80	柔畑遺跡	-	-	不明	掛け口~焚口片	II	-	
81	大里町遺跡	1区土壤I	土師器甕、鉢	1	掛け口~基部付近	II	肥厚	5

#### (4) まとめ

2区出土品を佐賀県内の例と対比させると、底の大きさから2期のものと特徴が一致し、SD256の出土遺物の時期とも矛盾しない。また出土遺構に關しても他の遺跡と同様に遺物が大量に廃棄された溝からの出土であることから、2期の所産と考えて差し支えない。

1期の例は底が小さく、掛口端部を薄く仕上げるものがあることが特徴として挙げられる。また今のところ1期の底から2期の底の形状の出現は説明できないことから、2期のものは1期からの型式変化により出現したものではなく、再度大きな底を持つものが導入された可能性がある。しかし佐賀平野では7世紀代の遺跡が少ないこともあり、その検証は今後の課題である。また2期には器高が30cmを超える大型品と25cm前後の中型品があるが、掛口径にはさほどの差はなく、他地域にも同様の大きさの差があるのが課題である。山陰地方（2005）では大型品が多く、中型品は少ないようである。

出土数は2期がピークとなり、3期以降急激に減少する。管見によると福岡県内では1期にすでに底が大きなものや、須恵質のものも出土しており、出土数も少くない。佐賀県内とは様相が若干異なるようであり、造り付け竈の開始時期や渡来系文物の分布の傾向と一致する可能性が高い。出土数は2期がピークとなる。この他長崎県の例でも2期が中心となる。杉井氏（1998）によると熊本県内では1期の例はほとんどなく、2期が中心となる。このことから九州地方では2期に出土数のピークがあるのは確実である。山陰地方では1期が最も多く、ピークとなる時期が若干古いようであり、使われ方が同じであったか、導入の契機に違いがあるのか等は検討すべき課題である。

破片での出土がほとんどであり、使用中に破損したため廃棄したのか、使用後に壊して廃棄したのかが大きな問題である。出土遺構は各時期共に土器が大量に廃棄された土壌や溝からの出土が多い。

以上簡単に佐賀県内の移動式竈について検討したが、前述のとおり移動式竈は破片での出土がほとんどであり、残された課題が多い。今後詳細に検討するためには広域にわたり器形や出土状況を調べ、時期毎の変遷や地域性を抽出し、使用方法や使用の場面の復元を行なわなければならない。

#### 参考文献

- 稻田孝司 1978 「忌の竈と王権」『考古学研究』第25号第1号
- 岩橋孝典 2003 「山陰地方の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について」『古代文化研究』第11号  
島根県古代文化センター
- 加藤裕一 2005 「移動式竈について」『名和中畠遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書第103集  
財団法人鳥取県教育文化財団
- 杉井健 1998 「古代における竈の変質」『古代中世の社会と国家』清文堂出版
- 1999 「熊本県における瓶形土器と竈の普及—熊本県出土瓶形土器・造り付け竈・移動式竈の集成—」『文学部論叢』第65号 熊本大学文学会
- 近澤豊明 1992 「竈形土器について」『長岡京古文化論叢Ⅱ』 中山修一先生喜寿記念事業会
- 九州前方後円墳研究会 2005 「九州における渡来人の受容と展開」 第8回

## 4. 唐津市大江前遺跡出土の弥生早～前期土器に付着した炭化物の炭素14年代測定 国立歴史民俗博物館研究部 藤尾慎一郎・小林謙一

### (1) 調査概要

唐津市（旧浜玉町）に所在する大江前遺跡の調査によって出土した弥生早期後半から前期初頭にかけての突帯文土器、および板付I式土器9点に付着した炭化物の炭素14年代を測定したところ、以下のような点が明らかになった。

測定したのは夜白IIa・IIb式と板付・式に比定された壺である。いずれも口縁部外面や底部内面に付着した炭化物をAMS-炭素14年代測定した結果、2500~2400<sup>14</sup>C BP年代の測定値が出た。較正年代に直すと前9~前8世紀を中心とする点でこれまで国立歴史民俗博物館（以下、歴博）が九州北部で測定してきた夜白・式や板付・式の較正年代と整合的であるものの、玄界灘沿岸地域における夜白・b式の炭素14年代としては初めて、2400<sup>14</sup>C BP年台の測定値を得ることができた。これは夜白・b式の下限を知るうえで貴重なデータといえよう。

### (2) 調査の経過と資料の選定

國學院大學橋本短期大學の小林青樹氏のもとに、玄界灘沿岸地域では珍しい大洞系土器が、夜白式土器に伴って出土したという情報が、調査担当の唐津市文化課・美浦雄二氏から届いたのは、2005年の冬に入ろうとする頃であった。

大洞系土器と夜白式との炭素14年代を比較することは東北北部と九州北部の併行関係を知るうえでまたない機会と判断した藤尾は、小林氏と駒澤大学の設楽博己氏とともに、2006年1月26日に現地を訪れた。二人に大洞系土器の出自を調べてもらうためである。

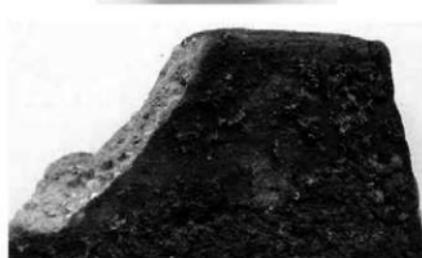
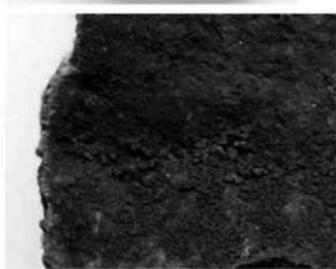
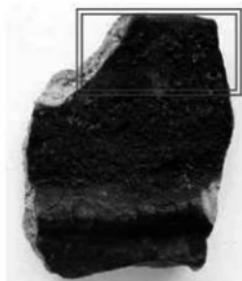
大洞系土器は、二人の観察によって大洞A1式に相当することがわかり、夜白IIb式・板付I式と伴って出土したことを確認することができた。大洞系土器の玄界灘沿岸地域における出土は、福岡市博多区雀居遺跡4次調査で大洞C2式と夜白IIa式が伴うことが確認されていたが、それに次ぐ2例目となった。現在、大洞系土器の出土地としては大江前遺跡が最西端である。

夜白IIb式と板付I式を中心に14点の試料を採取したが、測定値を得たのは夜白II式1点と、夜白IIb式6点、板付I式の2点をあわせて9点である。板付I式の資料は粗型壺と底部破片なので、典型的な如意状口縁をもつ板付I式の測定値を唐津地域で得ることは今回もできなかった。

以下、試料を採取した土器の説明（藤尾）、前処理・測定方法（小林謙一）の順に述べ、最後に得られた測定値の意味するものについて考察する。

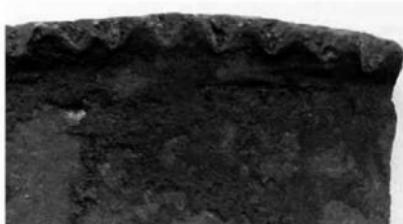
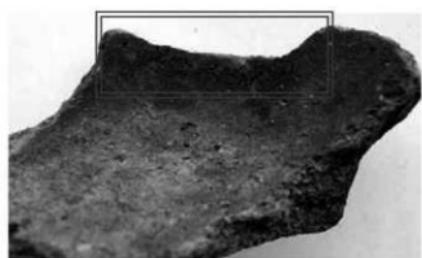
### (3) 測定土器の考古学的位置づけ

夜白式土器が主に出土したSD01溝は、水田関連の施設と考えられているもので、先に測定した唐津市梅白遺跡出土土器が出土した溝と同じ性格をもつ。出土した土器群はほぼ同時期と考えられているが、報告書をみる限りにおいては、夜白IIb式を中心として、夜白IIa式が若干と、粗型壺、板付I式からなる。以下、特に断らない限り、SD01上層から出土したことを意味している（写真1~3）。



資料1 030002036 SAGFJ3 屈曲部内面より採取

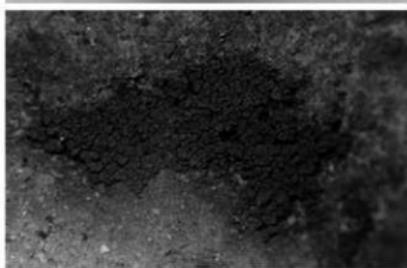
資料2 030002036 SAGFJ3 口縁部外面より採取



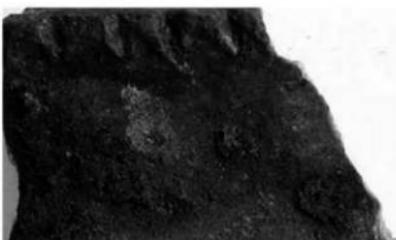
資料3 030002044 SAGFJ5 口縁部外面より採取

資料4 030002045 AGFJ6 底部内面より採取

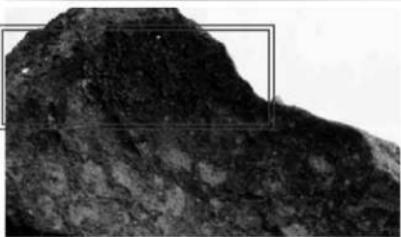
写真1 炭化物の最終箇所1（囲んだところが拡大箇所）縮尺不同



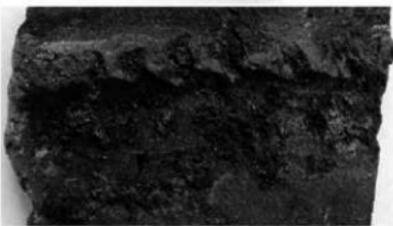
資料5 030002052 SAGFJ7 底部内面より採取



資料6 030002025 SAGFJ8 口縁部外面より採取

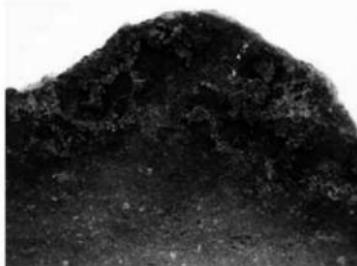
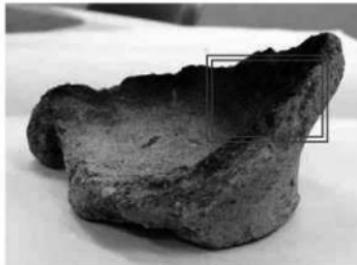


資料7 030003040 SAGFJ9 底部内面より採取



資料8 030002069 SAGFJ13 口縁部外面より採取

写真2 炭化物の最終箇所2（囲んだところが拡大箇所）縮尺不同



資料9 030002141 SAGFJ14 底部内面より採取

写真3 炭化物の最終箇所3  
(囲んだところが拡大箇所) 縮尺不同

化した刻目をもち、縦方向の刷毛目調整を外面におこなうなど、板付I式出現期の古い様相をもつことから、夜白IIb式に比定した。口縁部外面の炭化物を測定した。

資料4 (03002045, SAGFJ6)

甕の底部破片である。夜白式の特徴である逆台形の張り出しがないので、夜白IIb式と考えられる。内面の炭化物を測定した。なお報告書に図面は掲載されていない。

資料5 (03002052, SAGFJ7、図III-12-36)

4と同じく甕の底部破片である。逆台形の張り出しがない点は4と同じだが、器壁外面の色調が明るい赤褐色であることから板付I式に比定した。内面に厚さ2~3mmに付着した炭化物を測定した。

資料6 (03002025, SAGFJ8、図III-10-14)

口縁部がわずかに外反した板付祖型甕である。刻目を外端部に寄せて施文するもので、筆者の分類では板付I式に変化しない祖型甕Bに相当する。口縁部外面に付着した炭化物を測定した。祖型甕の測定としては雀居遺跡12次調査のJKY6に次いで2例目の測定値となる。

資料7 (03003040, SAGFJ9)

甕の底部破片である。逆台形の張り出しが強いことから夜白IIa式の可能性がある。内面に付着した炭化物を測定した。なお報告書に図面は掲載されていない。

資料1 (03002036, SAGFJ3、図III-10-2)

前者は佐賀県教育庁の管理番号、中者は歴博資料番号、後者は報告書の図版番号である。口縁部に直接刻目、屈曲部に貼付突帯をもつ突帯文土器である。いわゆる唐津地域の前期初頭にもっとも多く分布する唐津型甕に属するが、口縁端部内面の凹線状のナデはそれほど強くない。内外面とも炭化物が付着していたが、量が多い屈曲部内面に付着していた炭化物を測定した。なお残試料が少なく、炭素12と炭素13の同位体比である $\delta^{13}\text{C}$ は測定できなかった。

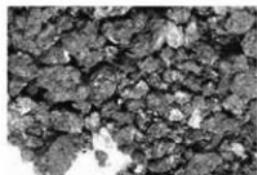
資料2 (03002033, SAGFJ4、図III-10-5)

口縁端部からかなり下がった位置に突帯を貼り付けるもので、屈曲せずそのまま底部へといたる砲弾型の器形である。刻目が細いヘラ刻目なので夜白IIb式に比定した。口縁部外面に付着した炭化物を測定した。

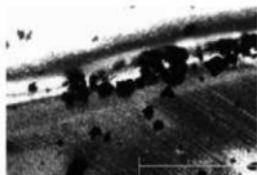
写真中の赤い枠線で囲んだ部分は試料の採取箇所である。

資料3 (03002024, SAGFJ5、図III-10-11)

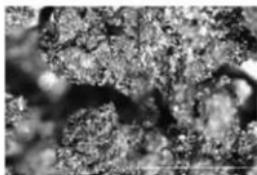
口縁部突帯の貼り付けがきわめて薄い砲弾型一条甕である。突帯上面はすでに平坦化している。定型



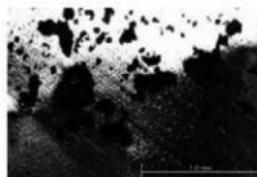
1 (SAGFJ3b) AAA処理前 18倍



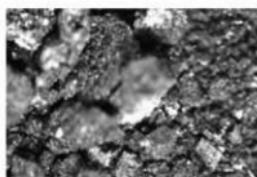
1 AAA処理後 18倍



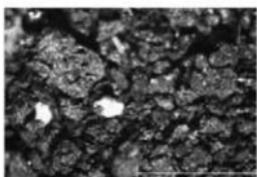
2 (SAGFJ4b) AAA処理前 18倍



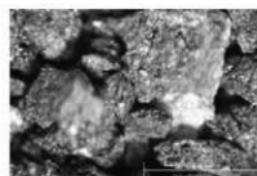
2 AAA処理後 18倍



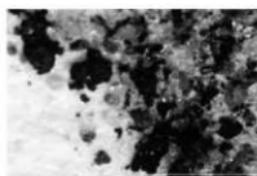
3 (SAGFJ5b) AAA処理前 18倍



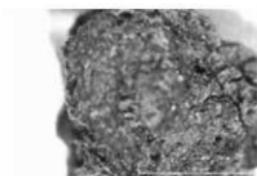
3 AAA処理後 18倍



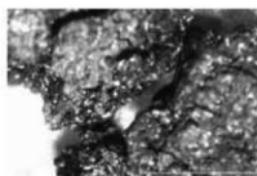
4 (SAGFJ6b) AAA処理前 18倍



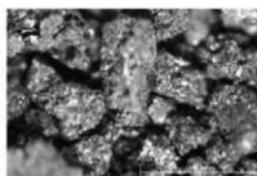
4 AAA処理後 28倍



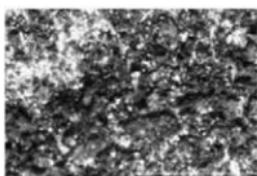
5 (SAGFJ7b) AAA処理前 28倍



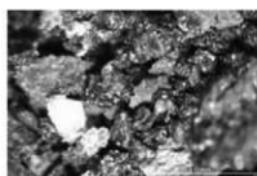
5 AAA処理後 18倍



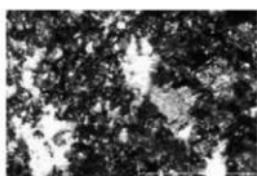
6 (SAGFJ8b) AAA処理前 18倍



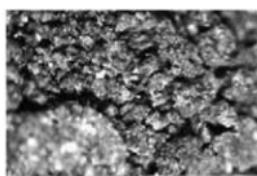
6 AAA処理後 18倍



7 (SAGFJ9b) AAA処理前 28倍

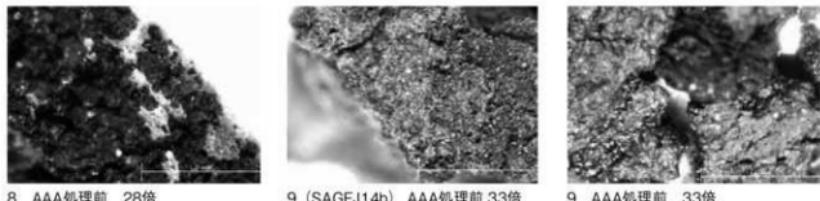


7 AAA処理後 28倍



8 (SAGFJ13b) AAA処理前 28倍

写真5 炭化物の顕微鏡写真1（左：前処理前、右：前処理後）



8 AAA処理前 28倍

9 (SAGFJ14b) AAA処理前 33倍

9 AAA処理前 33倍

写真6 炭化物の顕微鏡写真2（左：前処理前、右：前処理後）

資料8 (03002069, SAGFJ13)

3区包含層第4層から出土した砲弾型一条壺の口縁部破片である。口縁端部から下がった位置に突帯を貼り付けるという古い特徴をもつが、刻目は小ぶりのため夜白II b式まで下る可能性もある。口縁部外面の炭化物を測定した。なお報告書に図面は掲載されてない。

資料9 (03002141, SAGFJ14, 図III-24-37)

壺の底部破片で、4区SD01下層から出土した。逆台形の張り出しあはないので夜白II b式か板付I式であろう。内面の炭化物を測定した。

#### (4) 炭化物の処理

炭化物の前処理は、国立歴史民俗博物館でおこなっている通常の手順（註1）で、2003年度に歴博年代測定実験室において遠都慎がAAA処理（酸、アルカリ、酸による化学洗浄）を行った。前処理前と前処理後に顕微鏡下で肉眼観察し、試料が良好なことを確認した（写真4-5）。前処理後の二酸化炭素化精製及びグラファイト化は試料4は地球科学研究所を通してアメリカのベータアナリティック社に委託した。その他は歴博年代測定実験室において宮田佳樹が行った。15個体、18試料（部位別にSAGFJ2は3試料、SAGFJ3は2試料）について行ったが、前処理後の状況で炭素量不足のものがあり、結果的に9点について年代測定を行うことができた。以下に、炭化物の拡大写真と、炭化物の採取量、処理量、前処理後の回収量、精製用の燃焼量、燃焼後の二酸化炭素の炭素相当量（以上mg単位）および、試料の状況を検討するのに適した二酸化炭素相当量/燃焼量で表される炭素含有率（%）を表示する（表1）。1 (SAGFJ3b.6) 以外は、おおむね50%程度と良好な炭素含有率である。4(SAGFJ6)が含有率18%と低いが、土器付着物でありミネラルの混在があったためと考えられ、10%以上は含有率があることから見て、年代測定用試料としては特に支障ないと考える【小林2006】。

表34 試料の重量と炭素含有率

試料	採取量	処理量	回収量	燃焼量	炭素相当量 (CO <sub>2</sub> )	炭素含有率 (%)
1 (SAGFJ3b)	1297	1297	1.46	1.25	0.55	43.9%
2 (SAGFJ4)	6041	50506	5.86	4.22	2.59	61.3%
3 (SAGFJ5)	5756	5756	3.81	2.18	1.20	54.9%
4 (SAGFJ6)	3028	3028	2.99	3.04	0.52	17.6%
5 (SAGFJ7)	5020	37423	28.09	3.88	2.13	54.8%
6 (SAGFJ8)	4858	67.99	4.11	2.30	1.11	48.5%
7 (SAGFJ9)	5202	5202	19.39	3.10	1.68	54.1%
8 (SAGFJ13)	3586	3586	4.82	2.51	1.27	50.8%
9 (SAGFJ14)	5760	13963	12.36	4.01	2.20	55.0%

## (5) 測定結果と暦年較正

年代測定は、2003年度に地球科学研究所を通してアメリカのペータアナリティック社に委託した（測定機関番号Beta）。なお、別に佐賀県でも同一試料をパレオラボ社に委託した測定結果があるので、あわせて較正年代を検討する。

図1・2は、確率密度分布である。以下に較正年代についてみておく（表2）。資料1・2は、過去の大気濃度の変動により、較正曲線が横に寝てしまう、いわゆる「2400年問題」の時期に当たるが、その中でも後半なむち前7～5世紀の年代である可能性が極めて高い。これに対し、資料5～9は「2400年問題」の前半に当たり、前8～7世紀に相当する可能性が最も高い。一方、資料3・4は、「2400年問題」の時期よりも古い可能性が高く、較正曲線が急に下がる時期なので年代も絞りやすく前9世紀後半から前8世紀前半である可能性が極めて高いと言える。ただし資料4については、2400年問題の時期にも誤差部分では含むことになり、確率的には前7～6世紀に含まれる可能性も否定はできない。同様に、資料1・2が2400年問題の前半である前8～7世紀に、資料6～9が2400年問題中頃である前6世紀にかかっている可能性も、確率的にそれぞれ30%程度が見込まれ無視できない。測定数を増やすとともに、考古学的検討から絞り込んでいく必要がある。

表35 大江前遺跡出土土器に付着した炭化物の年代

試料番号	測定機関番号	炭素14年代 ( $^{14}\text{C}$ BP)	暦年較正年代calBC(2 $\sigma$ ) (%)は確率密度		$\delta^{13}\text{C}$
1 夜臼IIb式	Beta-2174221	$2460 \pm 40$	755 cal BC-680 cal BC	24.5%	非測定
			670 cal BC-410 cal BC	70.9%	
2 夜臼IIb式	MTC-07429	$2465 \pm 30$	760 cal BC-680 cal BC	27.8%	-265
			670 cal BC-480 cal BC	56.8%	
			465 cal BC-415 cal BC	10.5%	
3 夜臼IIb式	MTC-07430	$2610 \pm 40$	890 cal BC-875 cal BC	1.2%	-256
			845 cal BC-750 cal BC	85.5%	
			685 cal BC-665 cal BC	6.0%	
			640 cal BC-615 cal BC	1.4%	
			615 cal BC-590 cal BC	2.1%	
4 夜臼IIb式	Beta-2174222	$2580 \pm 40$	820 cal BC-740 cal BC	63.3%	非測定
			690 cal BC-665 cal BC	12.0%	
			645 cal BC-545 cal BC	20.1%	
5 板付I式	MTC-07431	$2525 \pm 30$	795 cal BC-725 cal BC	29.5%	-256
			690 cal BC-665 cal BC	17.6%	
			655 cal BC-540 cal BC	48.4%	
6 板付I式	MTC-07432	$2530 \pm 30$	795 cal BC-725 cal BC	32.2%	-264
			690 cal BC-660 cal BC	17.7%	
			650 cal BC-540 cal BC	45.5%	
7 夜臼II式	MTC-07433	$2530 \pm 30$	795 cal BC-752 cal BC	32.2%	-266
			690 cal BC-660 cal BC	17.7%	
			650 cal BC-540 cal BC	45.5%	
8 夜臼IIb式	MTC-07434	$2530 \pm 30$	795 cal BC-725 cal BC	32.2%	-269
			690 cal BC-660 cal BC	17.7%	
			650 cal BC-540 cal BC	45.5%	
9 夜臼IIb式	MTC-07434	$2550 \pm 30$	800 cal BC-745 cal BC	48.2%	-259
			690 cal BC-665 cal BC	17.2%	
			645 cal BC-550 cal BC	30.0%	

## (6) 年代的考察

### ① 全般

夜臼IIb式や板付I式という同時期に属する土器の測定値は、2600<sup>14</sup>C BP年台が1点（資料3）、2500<sup>14</sup>C BP年台が6点（資料4～9）、2400<sup>14</sup>C BP年台が2点（資料1・2）に分かれた。これまで歴博がおこなってきた夜臼IIb式・板付I式共伴期の炭素14年代は2500<sup>14</sup>C BP年台のものばかりだったので、資料3の2610<sup>14</sup>C BPは夜臼IIb式の炭素14年代としてはもっとも古く、また資料1の2460<sup>14</sup>C BPはもっとも新しい炭素14年代ということになる。

いずれもこれまで得られている値と比べて40<sup>14</sup>C BP年の差にすぎず、統計的には誤差の範囲に収まるので矛盾はない。なお板付I式は底部破片と粗型甕しか測っていないのではっきりしたことをいえる段階ではないが、唐津市菜畑遺跡の測定値と比べても矛盾はない。

### ② 夜臼IIb式の上限年代

夜臼IIb式に先行する夜臼IIa式の下限はこれまで福岡市橋本一丁田遺跡の2600<sup>14</sup>C BPだったので、夜臼IIa式と夜臼IIb式の境界が2600<sup>14</sup>C BP年付近に来るという予想はさらに確実性を増したといえよう。現在、板付I式の上限が2590<sup>14</sup>C BPであることとも整合性がある。板付I式の測定値が今後ふえて存続幅が確定してくれば、板付I式の炭素14年代と同じ年代を示す夜臼II式を、研究史での取り決めにしたがって夜臼IIb式といえる時期が来るかも知れない。

なお、板付I式が基本的に存在しない玄界灘沿岸地域以外の地域では、このような事態は発生しない。

### ③ 夜臼IIb式の下限年代

夜臼IIb式がどこまで存在するかという下限問題は、玄界灘沿岸地域とほかの地域では若干異なるようである。

#### 1) 玄界灘沿岸地域

器面調整や焼成法などが強生化する以前の、いわば最後の晩期系突唇文土器という位置づけが可能な玄界灘沿岸地域の夜臼IIb式のなかでもっとも若い測定値は、福岡市那珂君体遺跡4次の2510<sup>14</sup>C BPだった。

しかし2007年1月現在、2400<sup>14</sup>C BP年台を示す資料は今回の大江前遺跡と、福岡市雀居遺跡4次の資料をあわせた4点になり、夜臼IIb式の下限も2400<sup>14</sup>C BP年台の半ばまで下ることがわかっている。

夜臼IIb式の下限年代は板付IIa式との関係を考えるうえで重要である。まだ板付I式の測定例が少ないので単純な比較はできないが、夜臼IIb式・板付I式共伴期とはよんではいるものの、夜臼IIb式の存続幅である約150<sup>14</sup>C BP年は、板付I式の存続幅である約70<sup>14</sup>C BP年に比べて約2倍の幅を持つうえに、板付I式の終了後も夜臼IIb式はさらに5～60<sup>14</sup>C BP年続くのである。

本来、研究史では板付I式出現以降の夜臼式を夜臼IIb式と定義したわけだが〔山崎1980〕、板付I式終了後も夜臼IIb式が存在するという事態は、夜臼IIb式が伴わない板付I式単純期が、福岡県今川遺跡の調査成果をふまえて設定されたことからも、想定外だったことがわかる〔伊崎1981〕。まさに炭素14年代を使えばこそこのような新たな問題も議論できるのである。

板付IIa式の測定値は2400<sup>14</sup>C BPを出した雀居遺跡4次出土の1点しかないため、2400<sup>14</sup>C BP年代前半の夜臼IIb式が板付IIa式と伴うのかどうかは試料の増加を待つしかないが、IntCal04をみると2450<sup>14</sup>C BP年を前後する時期に板付I式と板付IIa式の境界が来ると予想している。

東部九州や西部瀬戸内における弥生水田稲作の開始年代のことを考えると、板付IIa式がどうしても2450<sup>14</sup>C BP年まで上がらざるを得ないからである。もし上がれば夜臼IIb式と板付IIa式が共伴すると

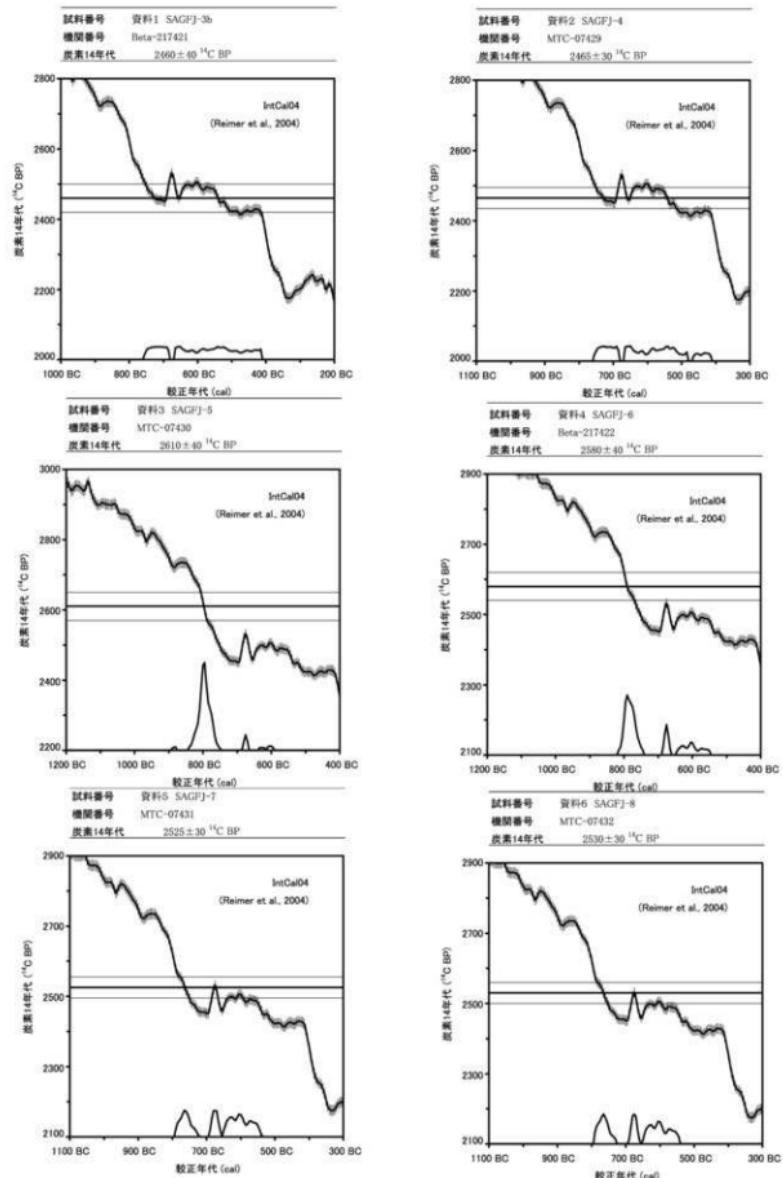


図103 曆年較正の確率密度分布1 (IntCal04による)

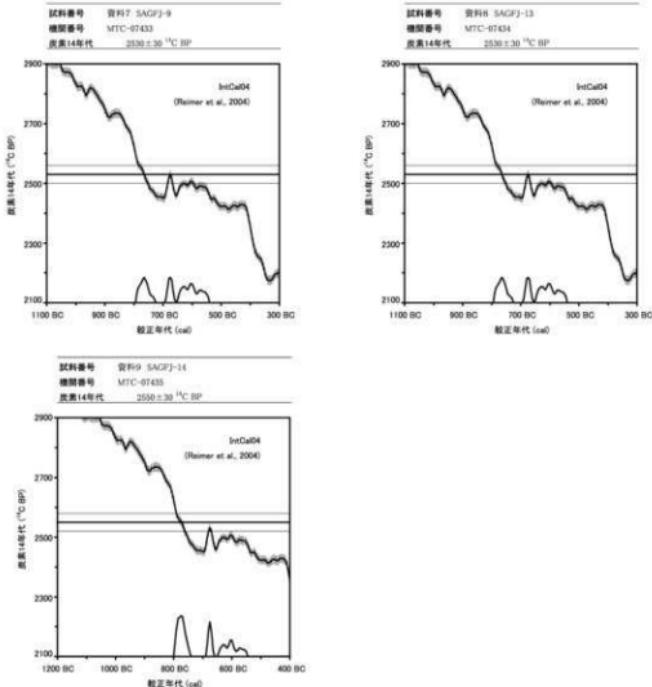


図104 曆年較正の確率密度分布2 (IntCal04による)

いう新たな事態も出てくるが、大江前遺跡においてはそのような状況を確認することはできない。

## 2) 玄界灘沿岸地域以外

2500~2400  $^{14}\text{C}$  BPごろの炭素14年代が得られているのは島原半島、豊後、大隅など、板付I式壺が分布しない地域である。長崎県南島原市の権現脇遺跡を例にすると、原山式や晩期系粗製深鉢が2500  $^{14}\text{C}$  BP年台後半に位置する〔藤尾・小林2006〕。これは板付I式併行期に相当する年代である。

豊後では夜臼IIa式併行の下黒野式や夜臼IIb式併行の一方平式の測定値は得られていないので、最後の晩期系突帯文土器の炭素14年代を押さえることはできていない。そして2400  $^{14}\text{C}$  BP年台を示す土器はすべて弥生化した突帯文系土器であることを考えると、玄界灘沿岸地域のように2400  $^{14}\text{C}$  BP年台を示す晩期系突帯文土器は存在しない〔藤尾・小林2006a〕。

大隅には2400  $^{14}\text{C}$  BP年台の晩期系突帯文土器がある。これらの突帯文土器は、指刻目や組織痕文をもつなど、山の寺式の特徴をもつため、筆者らは山の寺式の好試料と考えて測定をおこなった。ところが得られた測定値は2400  $^{14}\text{C}$  BP年台だった。山の寺式と見間違う突帯文土器がここまで下るとともに、孔列文をもつ鉢が伴っていたこともさらなる驚きであった。

したがって大隅では玄界灘沿岸地域とともに板付I式～IIa式併行期まで山の寺式の特徴をもつ晩期系突帯文土器が確実に存在するといえよう。

## (7) まとめ

大江前遺跡の水田に関する溝から出土した突帯文土器は、ほぼ夜白IIb・板付I式単純期であり、炭素14年代では2610~2450  $^{14}\text{C}$  BPまで約150年  $^{14}\text{C}$  BP年にわたる存続幅をもっていた。2600  $^{14}\text{C}$  BP年頃に板付I式の成立とともに出現する夜白IIb式は、2510  $^{14}\text{C}$  BPごろに板付I式がみられなくなても、およそ50  $^{14}\text{C}$  BP年ほど存続する。板付IIa式がいつ成立するかは不明だが、弥生水田稲作の東方への拡散時期から逆算すると、玄界灘沿岸地域では板付IIa式と共に存続している可能性がある。

大江前遺跡から出土した大洞A1式土器には炭化物が付着していなかったが、青森県域の大洞A1式の炭素14年代は、2500  $^{14}\text{C}$  BP前半から2400  $^{14}\text{C}$  BP年台に及ぶという小林謙一の指摘からすれば、東北北部と九州北部の併行関係も矛盾なく説明できる。

板付I式がまさに成立しようとした時期に東北北部の影響が及んでいたことの意味は大きい。大江前遺跡は梅白遺跡とは違って渡来文化の匂いが希薄なだけに、大洞系土器をもたない梅白遺跡との違いが注目される。

唐津平野では山の寺式の段階である2700  $^{14}\text{C}$  BP年台に松浦川左岸の菴畠遺跡で弥生稲作がはじまつたあと、夜白IIa式段階の2600  $^{14}\text{C}$  BP年台になって梅白や宇木汲田遺跡など松浦川右岸の宇木川流域で、さらに2500  $^{14}\text{C}$  BP年台になってようやく浜玉川流域で始まる。唐津平野という限られた空間の中でも100  $^{14}\text{C}$  BP年もの時間差があったといえるだろう。

本報告は1~3を藤尾、4~5を小林、6~7を藤尾が執筆した。報告を記すにあたり、佐賀県教育庁文化課の小松謙氏、川副麻理子氏、唐津市文化課の美浦雄二氏にお世話になった。歴博の弥生開始期の年代研究は、ここ唐津平野の梅白遺跡から始まっただけに、再び調査・研究の機会を与えてくださった小松氏には感謝の意を表します。また試料の前調整をおこなった歴博年代資料実験室の遠部慎氏、宮田佳樹氏にも感謝いたします。

この報告は、平成16年度文部科学省・科学研究費補助金学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア－炭素14年代測定による高精度編年体系の構築－」（研究代表者西本豊弘）の成果の一部である。

## 参考文献

- 伊崎俊秋 1981：「遺物－弥生土器について」『今川遺跡』津屋崎町文化財調査報告書4, pp.84-85.  
小林謙一 2006 土器付着物を用いた年代測定－試料採取と前処理－」『弥生時代の新世代』雄山閣出版  
藤尾慎一郎・小林謙一 2006a：「長崎県深江町権現脇遺跡出土土器に付着した炭化物の炭素14年代測定」  
『権現脇遺跡』深江町文化財調査報告書第2集, pp.623-635.  
藤尾慎一郎・小林謙一 2006b：「大分市玉沢遺跡出土土器に付着した炭化物の炭素14年代測定」『玉沢  
地区条里跡第7次調査』市民行政センター建設に伴う発掘調査、大分市埋蔵文化財調査報告書題  
66集, pp.-.  
山崎純男 1980：「弥生文化成立期における土器の編年研究－板付遺跡を中心としてみた福岡・早良  
平野の場合－」『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』pp.117-192.

## <註1>

(1) 前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA処理）。

AAA処理に先立ち、土器付着物については、アセトンに浸け振とうし、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（2回）。AAA処理として、80°C、各1時間で、希塩酸溶液（1N-HCl）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（2回）し、さらにアルカリ溶液（NaOH、1回目0.01N、3回目以降0.1N）でフミン酸等を除去した。アルカリ溶液による処理は、5回行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理（1N-HCl 12時間）を行いアルカリ分を除いた後、純水により洗浄した（4回）。

(2) 二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を燃焼（二酸化炭素化）、真空ラインを用いて不純物を除去。

(3) グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

## <註2>

年代データの14CBPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した14C年代（モデル年代）であることを示す。14C年代を算出する際の半減期は、5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（1標準偏差、68%信頼限界）である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比により、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比に対する同位体効果を調べ補正する。 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比は、標準体（古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比）に対する千分率偏差  $\delta^{13}\text{C}$  (パーミル, ‰) で示され、この値を-25‰に規格化して得られる $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比によって補正する。補正した $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、14C年代値（モデル年代）が得られる。加速器による測定は同位体効果補正のためあり、必ずしも $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を正確に反映しないため、試料に残余ある場合は前処理した試料を（株）明光通商に委託して、質量分析計で安定同位体比を測定した。その結果は、すべて-25~-26‰と、通常の陸生の植物に由来する可能性が高い結果であった。

測定値を較正曲線IntCal04（14C年代を曆年代に修正するためのデータベース、2004年版）(Reimer P et al 2004)と比較することによって曆年代（実年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、曆年代の推定値確率分布として表す。曆年較正プログラムは、歴博で独自に開発したプログラムRHcal (OxCal Programを応用した方法) を用いる。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦(cal BC)で示す。()内は推定確率である。



発掘調査に参加した皆さん



1. 1区全景（南から）



2. 2区南半下層自然流路1（真上から）



1. 2区南半下層自然流路2（南西から）



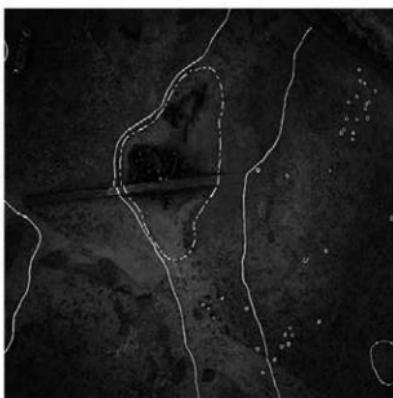
2. 2区南半下層自然流路3（西から）



3. 2区南半下層自然流路検出状況（西から）



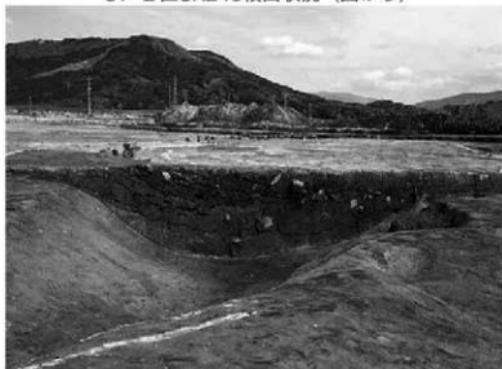
2. 2区SX246完掘状況（西から）



1. 2区SX246（真上から）



3. 2区SX246検出状況（西から）



4. 2区SX246土層（西から）



1. 2区下層水田畦畔芯材遠景（南から）



2. 2区下層水田畦畔芯材近景（南から）



3. 2区下層水田畦畔芯材中出土木製品1



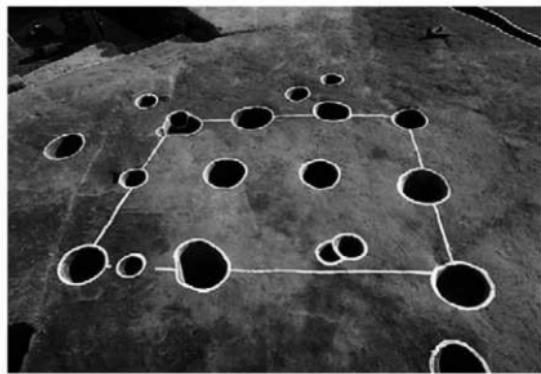
4. 2区下層水田畦畔芯材中出土木製品2



1. 2区北半掘立柱建物群（真上から）



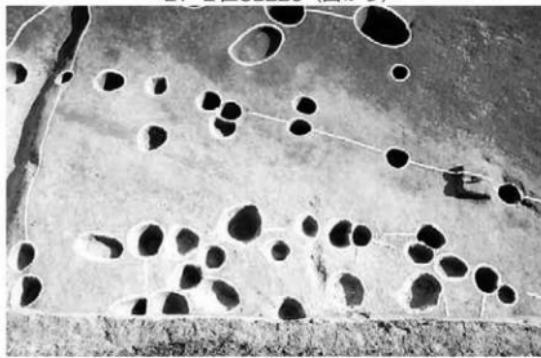
2. 2区SB202（東から）



1. 2区SB213 (北から)



2. 2区SB226 (西から)



3. 2区SB241・SA240 (真上から)



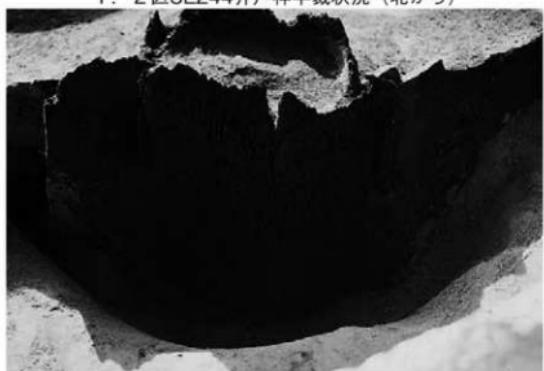
1. 2区SE244検出状況（北から）



2. 2区SE244完掘（北から）



1. 2区SE244井戸枠半裁状況（北から）



2. 2区SE244井戸枠1（北から）



3. 2区SE244井戸枠2（東から）



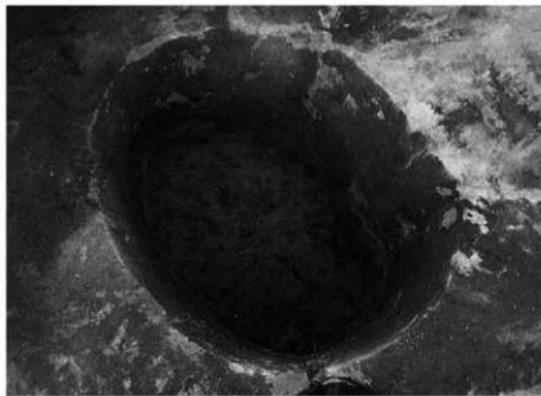
1. 2区SK207 (西から)



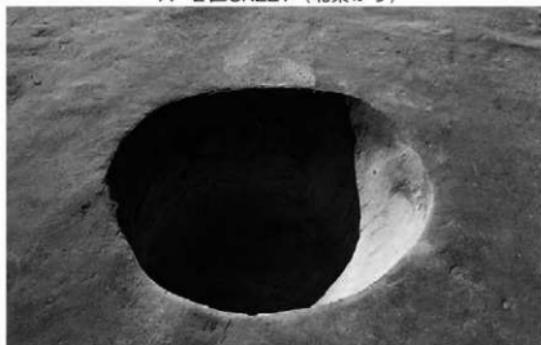
2. 2区SK208 (東から)



3. 2区SK214 (南から)



1. 2区SK221 (北東から)



2. 2区SK242 (西から)



3. 2区南半上層水田 1 (真上から)



4. 2区南半上層水田 2 (南から)



1. 2区SD256土層（西から）



2. 2区1号木簡出土状況



1. 2区木製品出土状況 1



4. 2区木製品出土状況 4



2. 2区木製品出土状況 2



5. 2区木製品出土状況 5



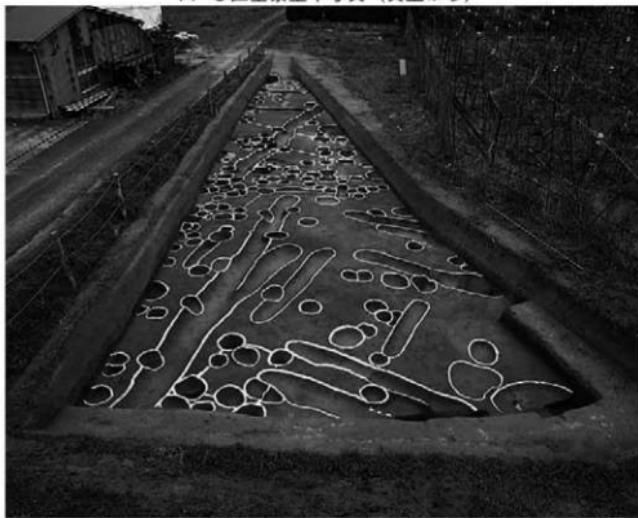
3. 2区木製品出土状況 3



6. 2区木製品出土状況 6



1. 3区全景空中写真（真上から）



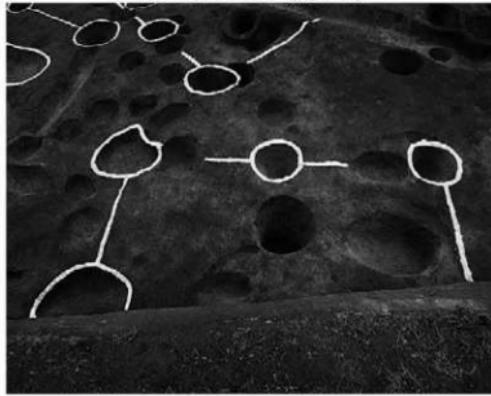
2. 3区全景（西から）



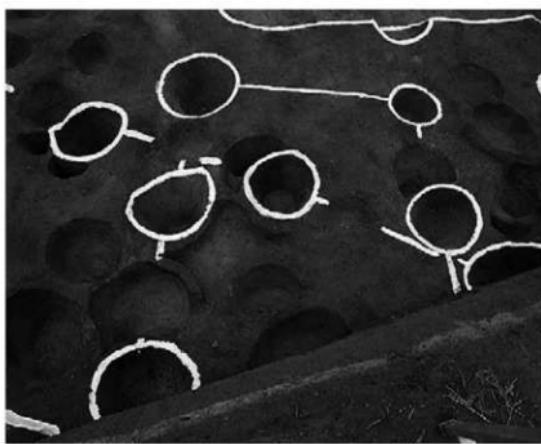
1. 3区SB315・SB319 (北から)



2. 3区SB316 (南から)



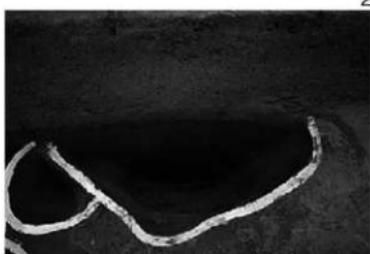
3. 3区SB319 (北から)



1. 3区SB317 (南から)



2. 3区SB320 (北西から)



4. 3区SK314 (北から)



3. 3区SK313 (北から)



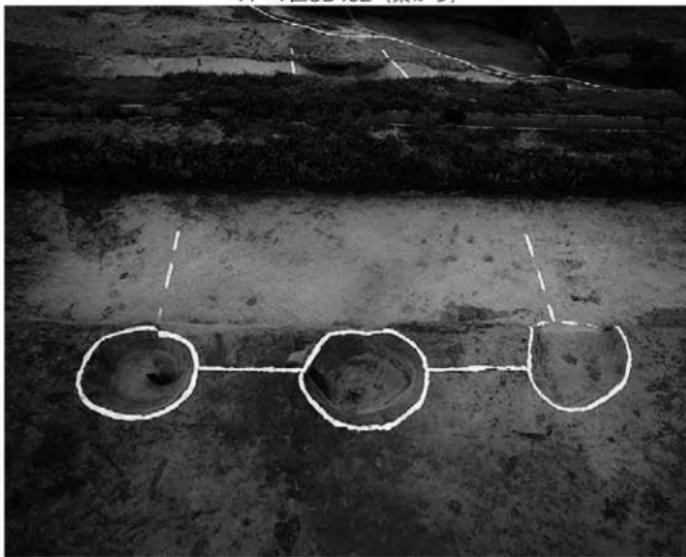
1. 4区北半近景（西から）



2. 4区南半近景 SD407・SD408・SD410・SD415（西から）



1. 4区SB402 (東から)



2. 4区SB404 (東から)



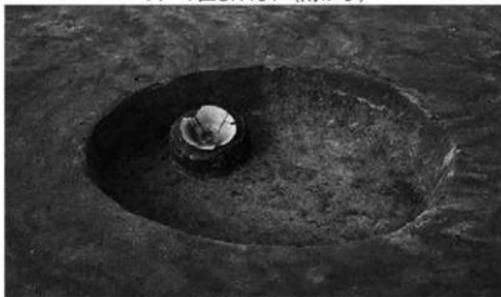
1. 4区SB405 (西から)



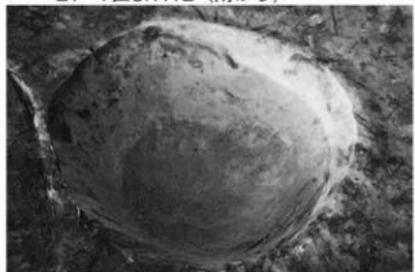
2. 4区SA418・SB402 (南から)



1. 4区SK401 (南から)



2. 4区SK412 (南から)



3. 4区SK406 (南から)



4. 4区SD411 (北から)



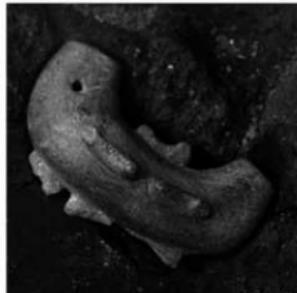
1. 8区近景（北から）



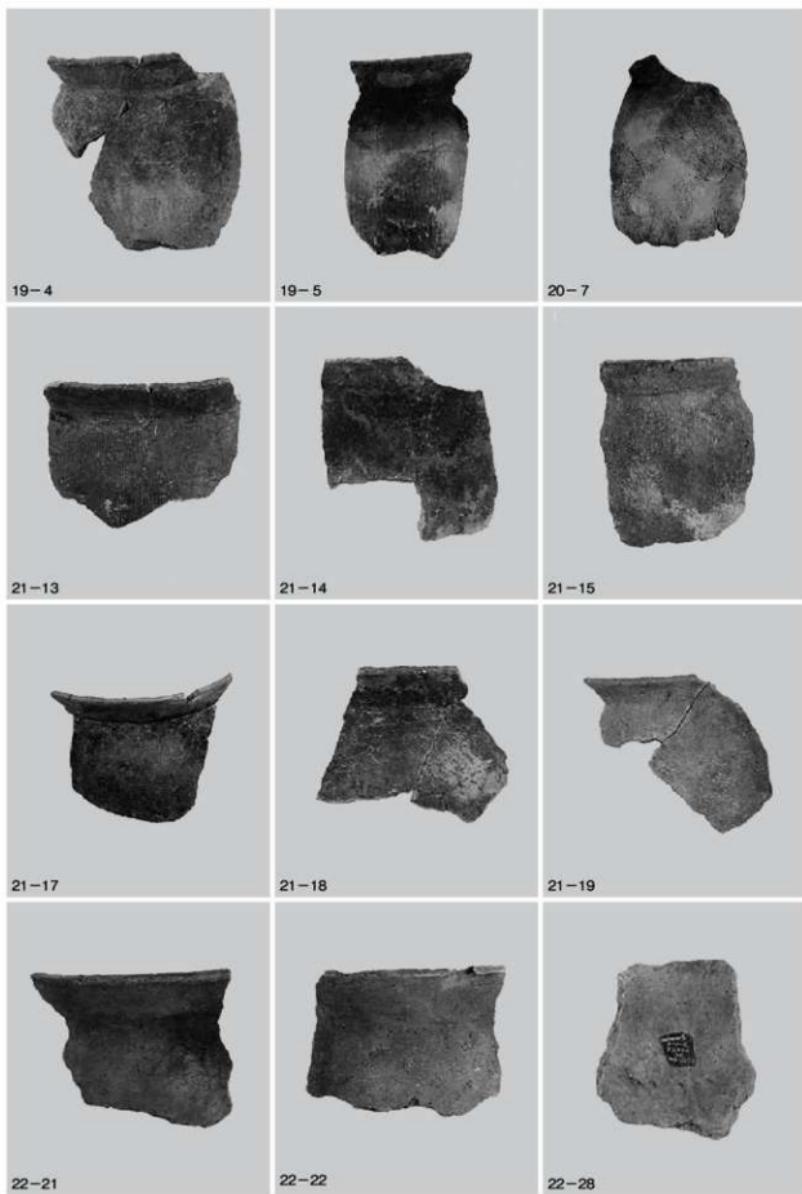
2. 9-1区近景（南から）



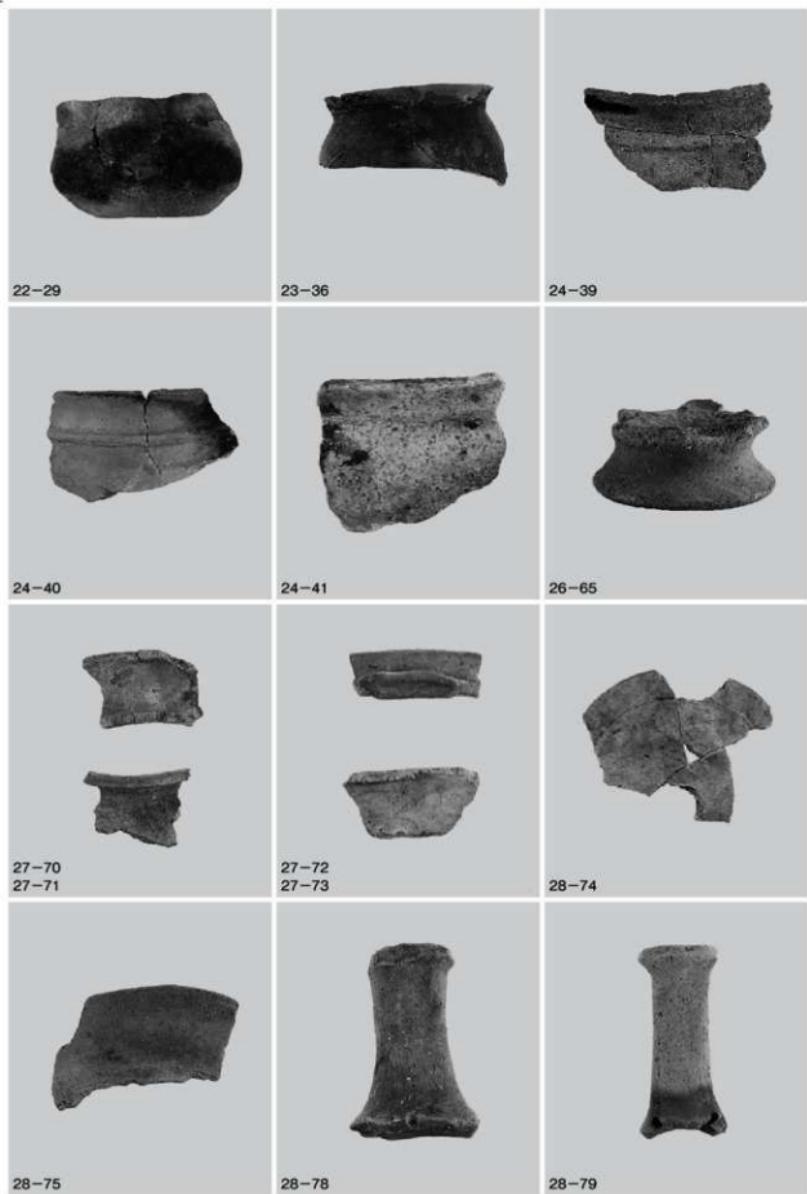
3. 9-1区調査風景（南西から）



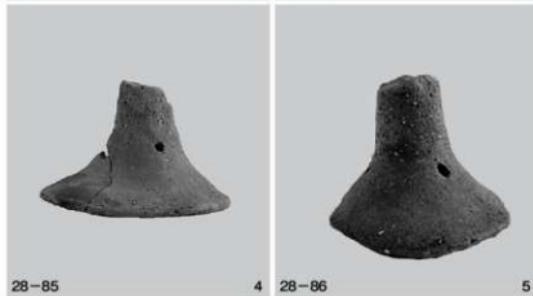
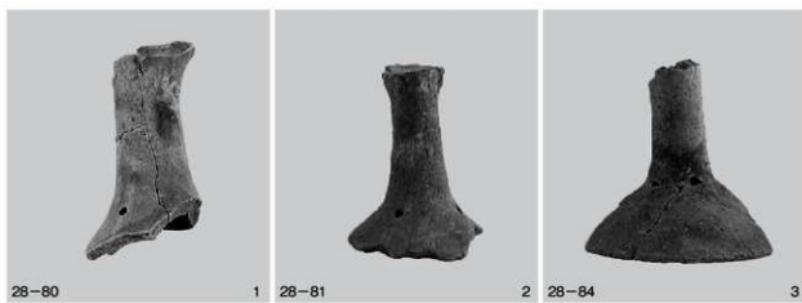
4. 子持勾玉出土状況



2区SX246出土土器 1



2区SX246出土土器 2



1 ~ 5 SX246出土土器  
6 SX246出土木製品

2区SX246出土土器・木製品



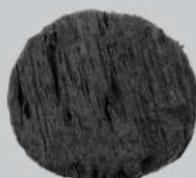
41-2



41-3



41-4



46-3



46-4



46-5

2区下層水田・SE244出土木製品



73-1



73-2



73-3



73-4



74-5



74-6

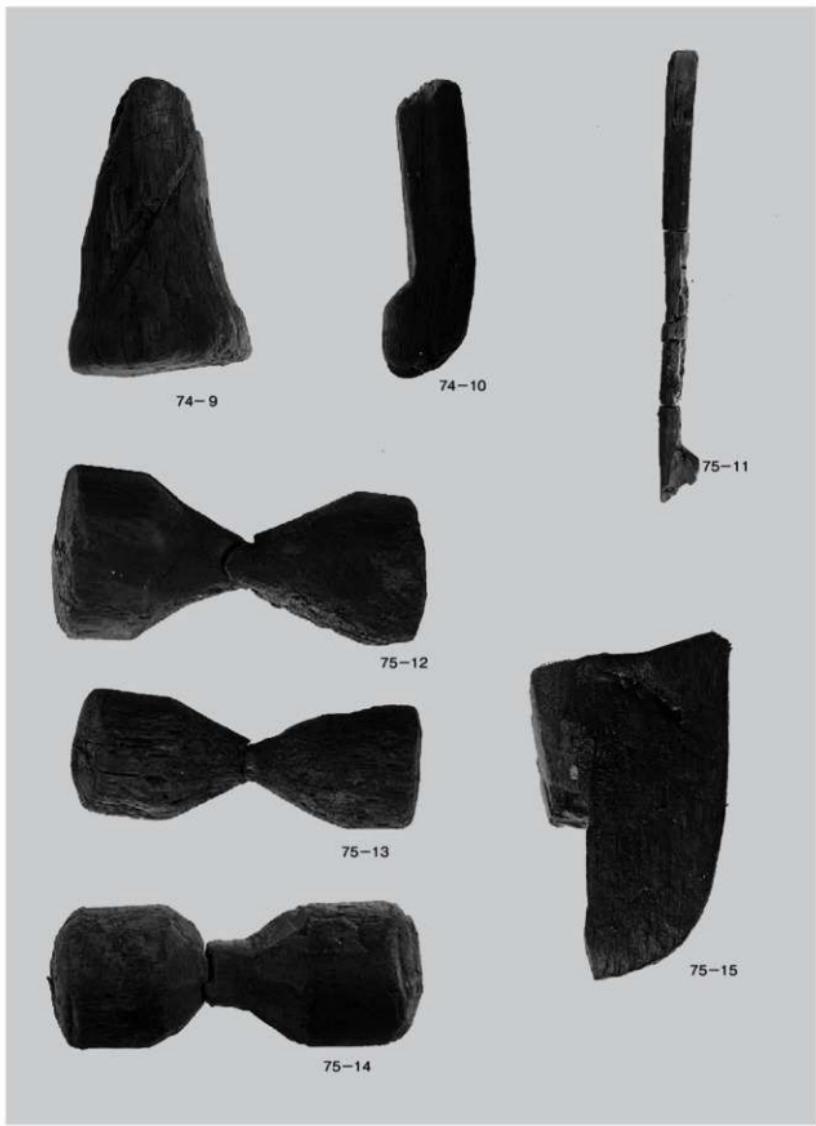


74-7



74-8

2区SD256出土木製品 1



2区SD256出土木製品2



75-16



76-19



76-20



76-21

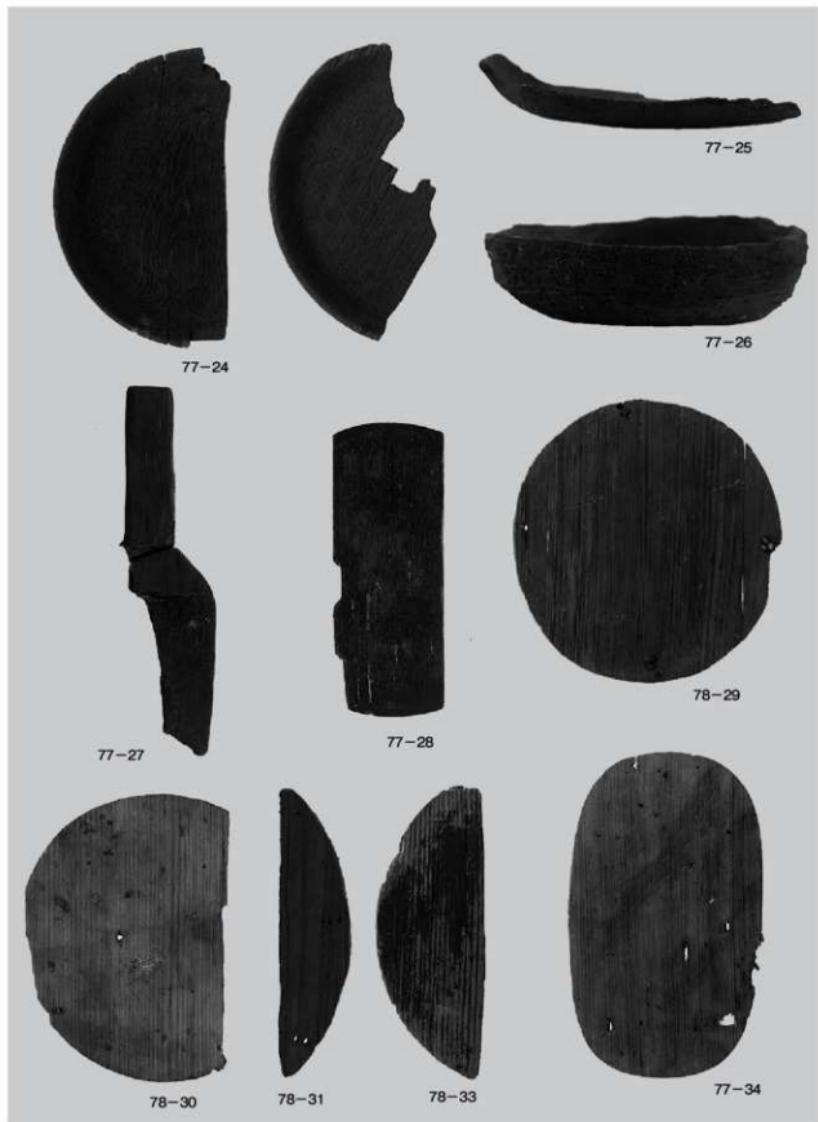


76-22



77-23

2区SD256出土木製品 3



2区SD256出土木製品 4



2区SD256出土木製品 5

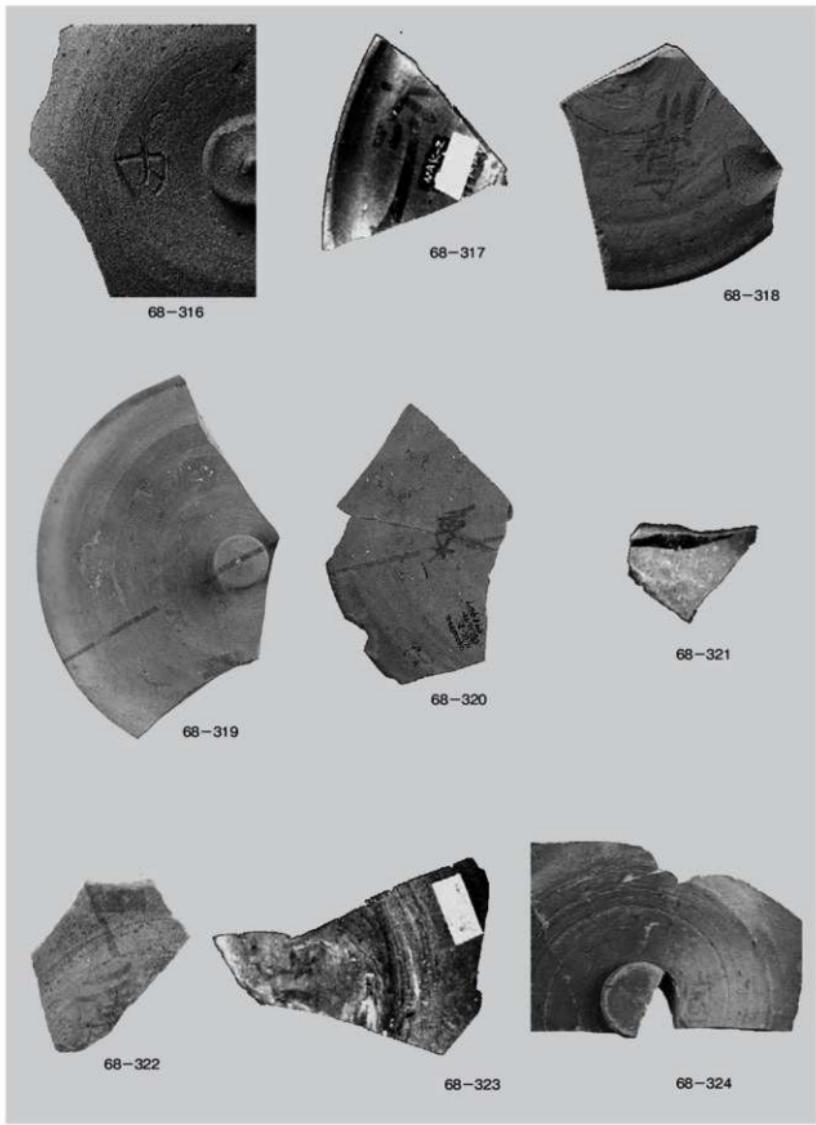


2区SD256出土木製品・9-1区出土子持勾玉

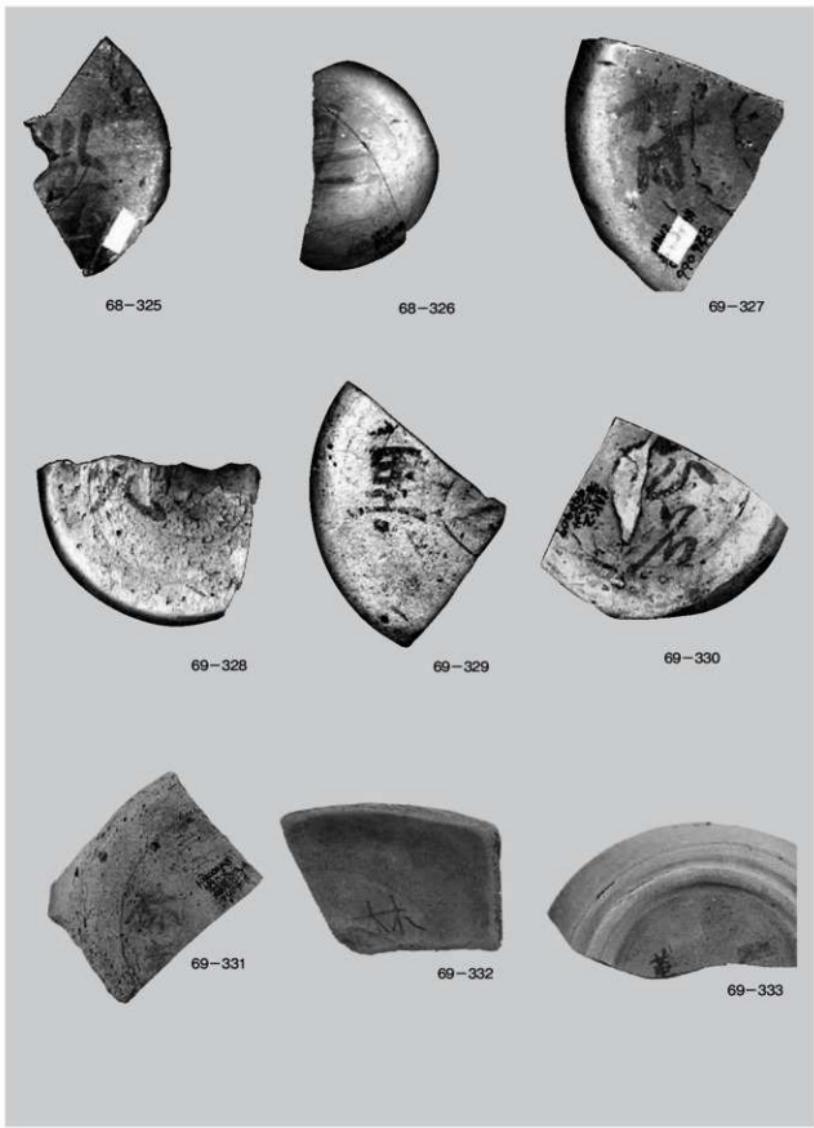


82

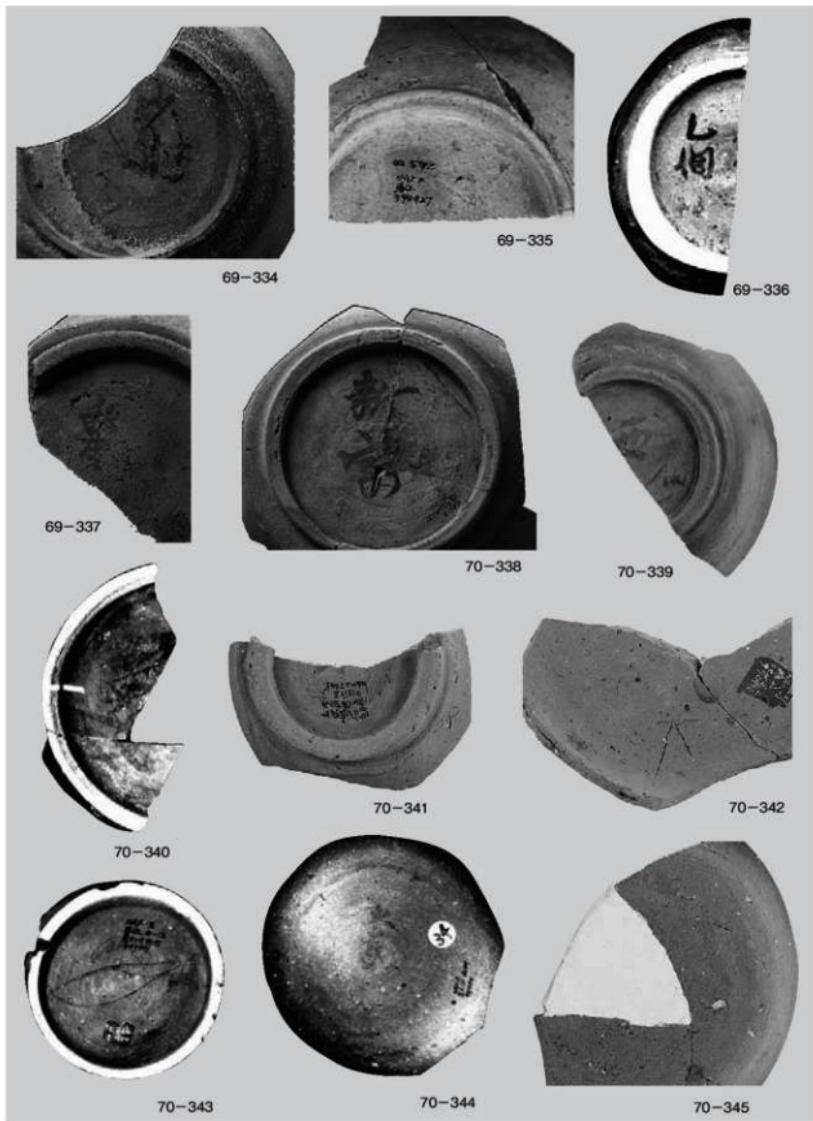
9号木簡



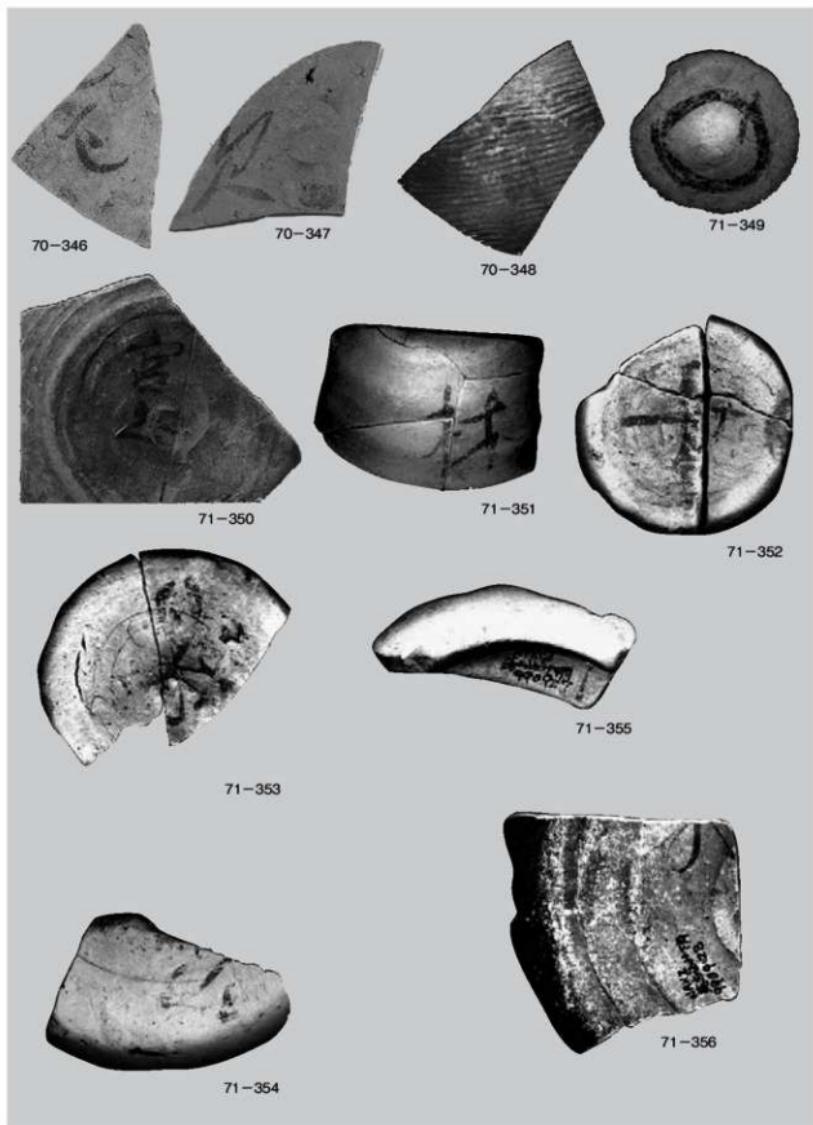
墨書土器 1



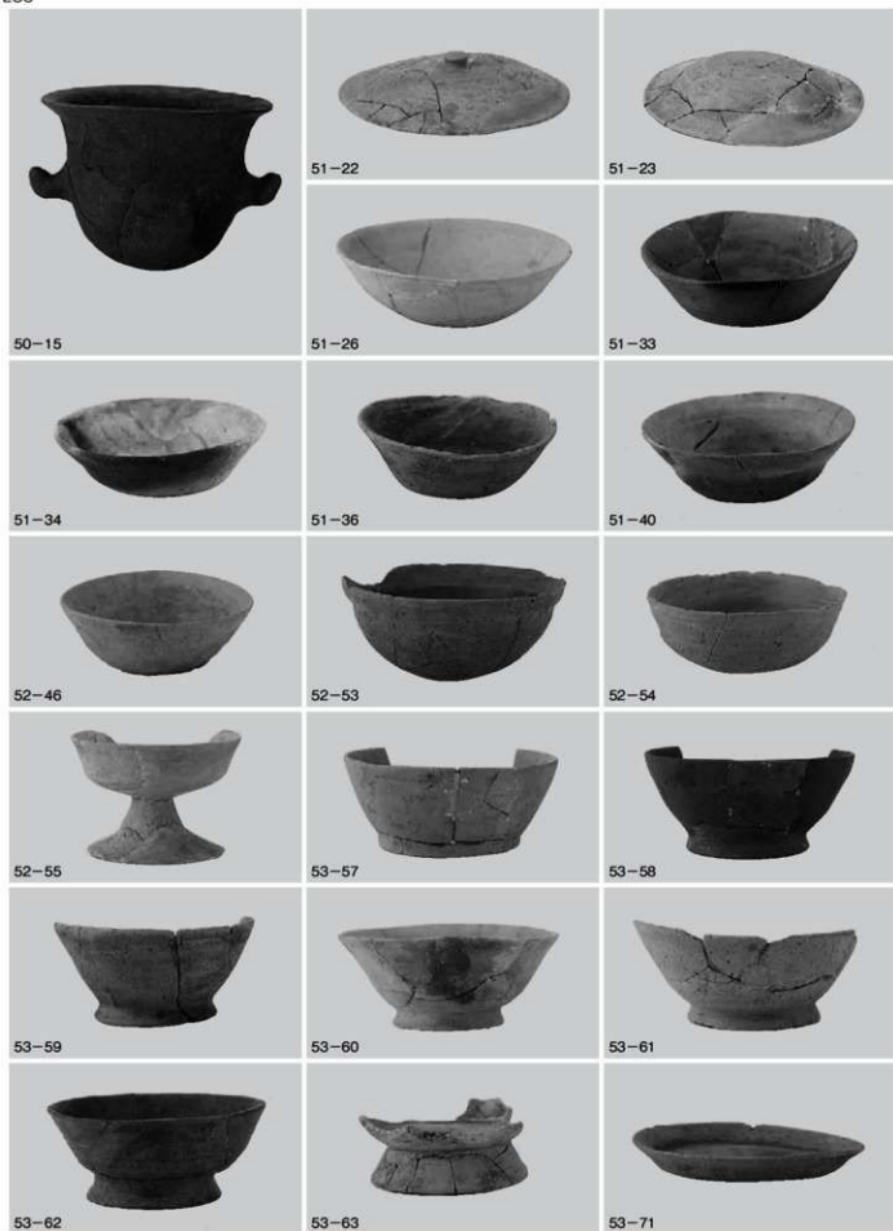
墨書土器 2



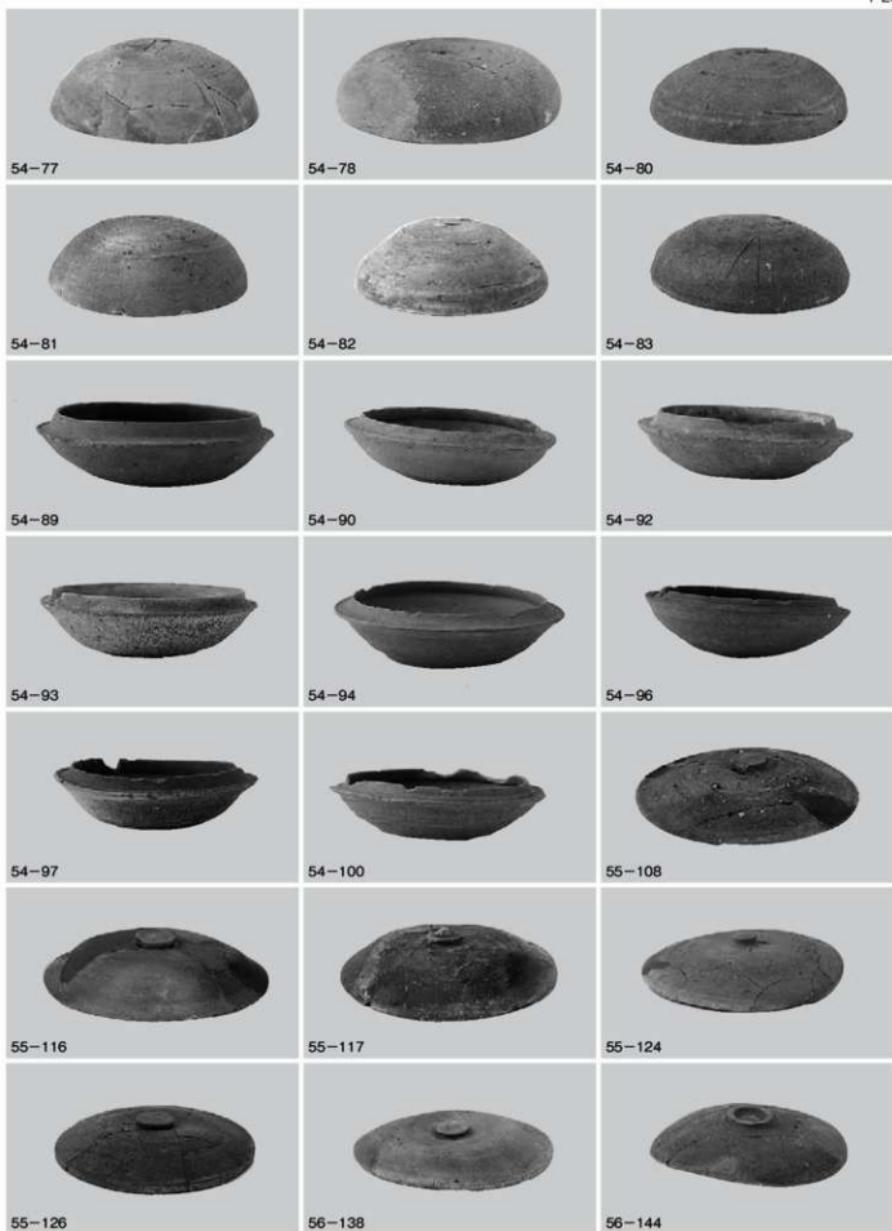
墨書土器 3



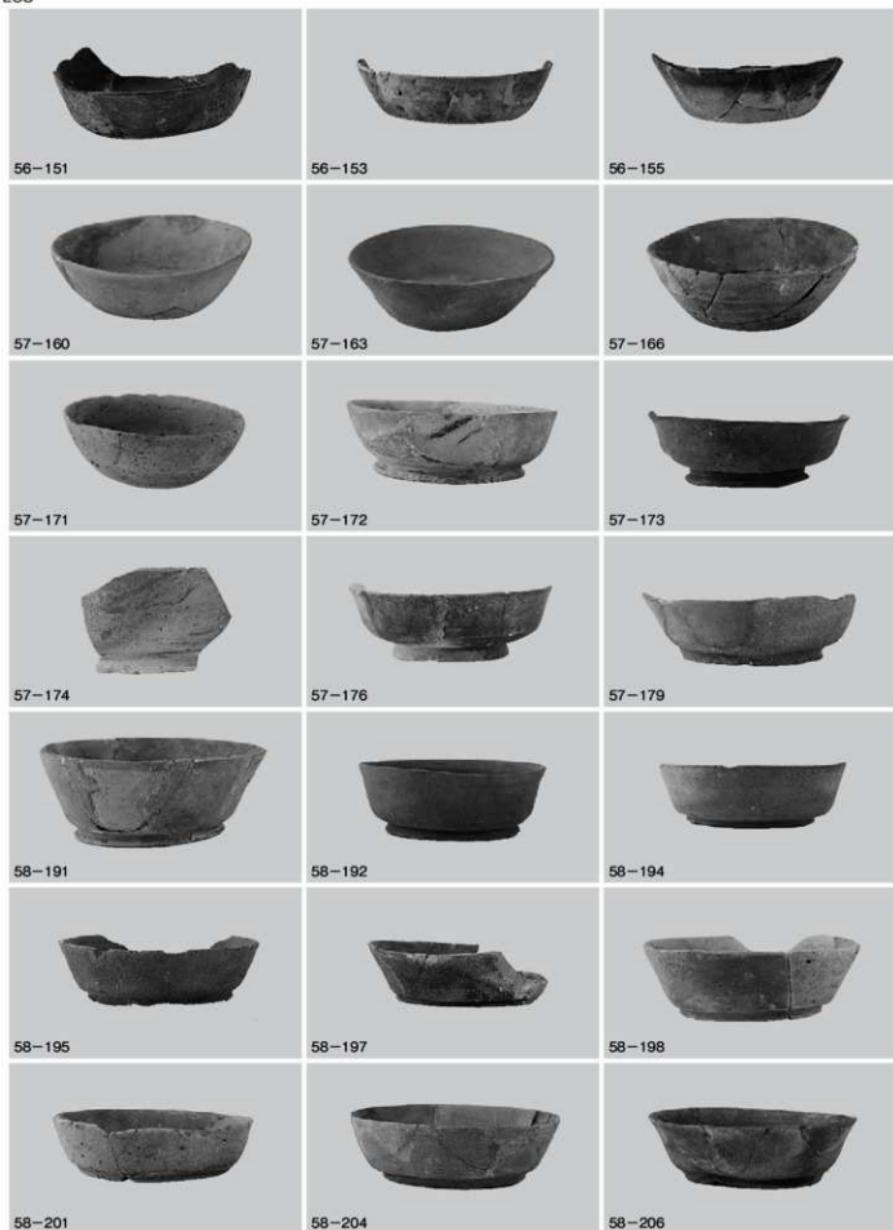
墨書土器 4



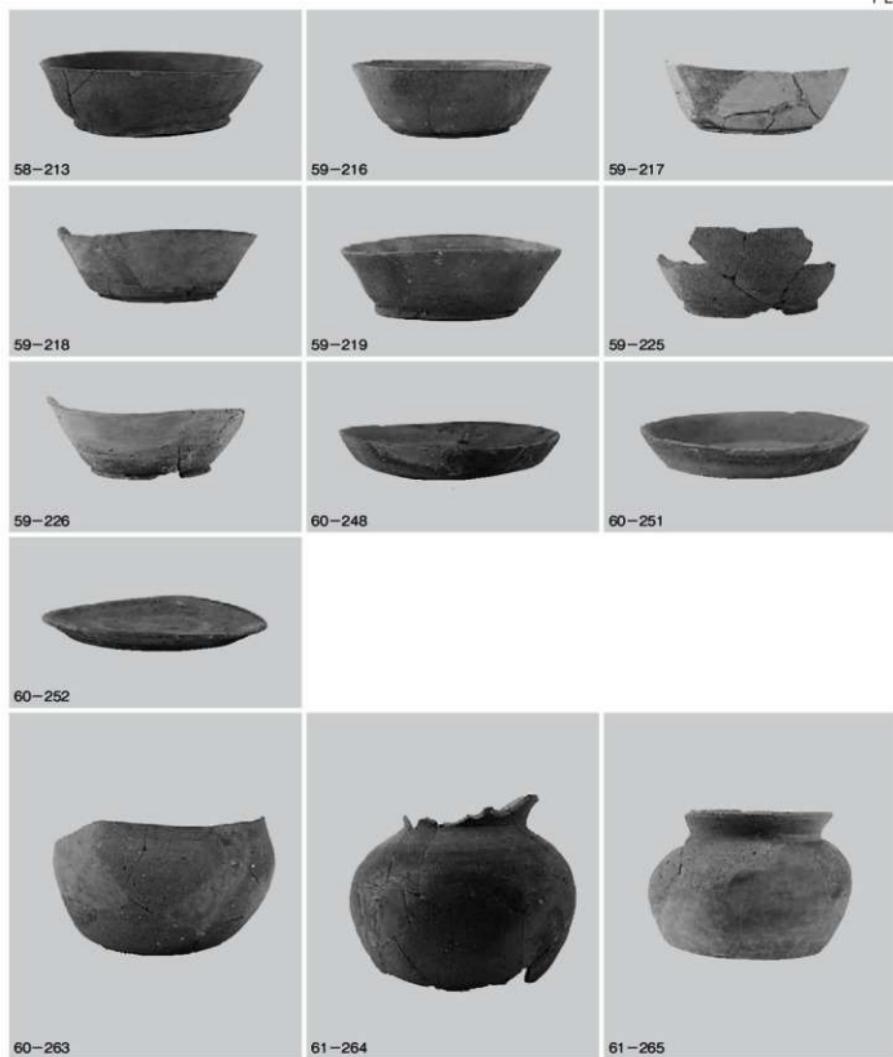
2区SD256出土土器 1



2区SD256出土土器2



2区SD256出土土器 3



2区SD256出土土器 4



2区SD256出土土器 5



1 ~ 5 4区包含層出土  
6 4区SK401出土



4区包含層・SK401出土土器

# 報告書抄録

ふりがな	なかばる							
書名	中原遺跡 I							
副書名	西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書							
卷次	4							
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第168集							
編著者名	小松謙・美浦雄二・川副麻理子							
編集機関	佐賀県教育委員会							
所在地	〒840-0041 佐賀市城内1丁目1番59号 TEL(0952)25-7232							
発行年月日	西暦2007年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
中原遺跡	唐津市 中原字瀬ノ内 ・西ノ端	412023	2146	33° 24' 57° 36164	129° 59' 59° 3893	平成11年 7月5日～ 平成13年 6月	23,940m <sup>2</sup> (本書掲載分)	西九州自動車道建設事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中原遺跡	集落・水田	弥生 奈良 平安前期	掘立柱建物 井戸 土坑 水田	木簡 墨書き土器 中空円面鏡 子持ち勾玉 土師器・須恵器 弥生土器 木製品	「大村」の墨書きされた木簡。 文字資料、硯など官衙的な遺物出土。 掘立柱建物群 奈良時代の水田跡。			

## あとがき

平成11年7月から始まった中原遺跡の調査は多大なる成果をあげた。調査が完全に終了したのは平成17年7月であり、調査には7カ年を費やした。路線のインターチェンジ部分にあたるため、調査面積も約90,000m<sup>2</sup>と極めて広大であり、調査区も1区～14区に分けた。中原遺跡の調査に携わった調査員は15名にものぼった。

中原遺跡は1960年代の日仏合同調査や80年代の唐津市教育委員会の調査などで弥生・古墳時代の墳墓が確認されており、調査当初から該期の遺構は十分に予測できた。事実、弥生・古墳時代の集落と墳墓の調査では甕棺墓や墳丘墓から青銅鏡、銅矛や銅鉗、鉄剣、硬玉製勾玉、碧玉製管玉などの副葬品が出土した。

全調査区の北半部は古代の遺構・遺物が出土したが、これはまったく予想していないものだった。中原遺跡の調査は北半部の古代からはじまつた。本書はこの古代の部の前編である。2区を流れる自然流路から1号木簡が出土した。木簡との初めての出会いであった。墨痕が明瞭に残っており、多くの方々のご教示により文字を読むことができた。その後の調査により自然流路は調査区内を東西方向に横切り、埋土中から木簡、墨書き器など多量の文字資料を確認した。佐賀県内では最も出土文字資料の多い遺跡になった。遺跡の性格をめぐっては縄文陶器や奈良三彩、曲物、挽物などの木製品などから官衙関連遺跡であることは想像できても肝心の建物群が確認できず、評価が定まらなかった。調査時、そして整理作業時においても悩ませられた。

出土遺物の整理は当初、佐賀市高木瀬事務所で行っていた。梅白遺跡の整理作業の延長である。現場事務所で水洗をすませた土器を高木瀬事務所に運搬し、接合、実測を行っていた。中原遺跡の調査が進むにつれ、遺跡の重大性が序々に明らかになってきた。そこで、調査・整理体制をより充実するために中原事務所を移転することになった。平成12年3月である。また、翌年の3月には佐賀市高木瀬事務所を閉鎖することになった。本書に掲載する1区～4区の調査をした時期はこのように中原遺跡の調査当初段階であるとともに、西九州自動車道発掘調査事業の整理作業体制の確立期であった。新築した中原事務所での整理体制は皆無といってよい状態であり、整理作業員さんの確保、指導などをを行い、現体制が次第にできていった。このような、調査・整理体制ができたのは当時の立石係長の尽力によるものである。

本書に掲載する調査区の調査から早いもので7年の歳月が流れている。報告書刊行作業の傍ら、他の調査区の膨大な調査記録や出土遺物の整理作業を進めている。一方、西九州道の発掘調査は玉島川を渡り、丘陵部の調査に入った。中原遺跡をはじめとして西九州自動車道路関連の発掘調査成果は唐津地域の古代史を考える上で不可欠なものになった。文化財は地域の活力であり、調査成果を今後に活用していくことが重要であろう。

最後になりましたが、発掘調査作業、整理作業に従事していただきました地元の皆様、調査の後方支援をいただいた県文化課、埋蔵文化財の保護にご理解いただきました佐賀国道事務所に対し、厚くお礼申しあげます。

(編者)

佐賀県文化財調査報告書第168集

## 中原遺跡I

-西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書(4)-

---

---

平成19（2007）年3月31日

発行 佐賀県教育委員会

〒840-0041 佐賀県佐賀市城内1丁目1番59号

印刷 株式会社佐賀印刷社

〒849-0921 佐賀県佐賀市高木瀬西6-11-7

---

---